



日本よ、今、闘論！倒論！討論！2025第917回
世界から相手にされなくなった日本の現実

R7/7/10

パネリスト：

宇山卓栄（作家）

折本龍則（千葉県議会議員）

掛谷英紀（筑波大学システム情報系准教授）※リモート出演

ジェイソン・モーガン（歴史学者・麗澤大学国際学部准教授）

室伏謙一（室伏政策研究室代表・政策コンサルタント）

用田和仁（元陸上自衛隊西部方面総監 陸将）※リモート出演

司会：水島総

水島「皆さん、今晚は」

一同「(礼)」

水島「闘論！倒論！討論！2025第917回目の討論となります。やはり今日のテーマも日本です。『世界から相手にされなくなった日本の現実』、昔はバッシングされましたけど、最近はまだバッシングだけになってしまったような日本でございます。金の切れ目が縁の切れ目というか、こういうような形の中で日本との関係、まあ、どうせ、あれはあとでついてくるだろうとか、こういう形になっている日本の存在感が前々からそうでしたけど、かなり落ちて来ている。

それと同時に、もう一つあったイメージ『侍の国』とか『道義』とか『道徳』とか、こういったものが非常に高い国だ、治安が良いとか、こういった心の問題の部分についても、80年にして尊敬を受けないような状態、残念ながら今だけ、金だけ、自分だけのような風潮が蔓延している。これは伊藤貫さんですけど『世界で最も卑怯で臆病な国民に成り果ててしまった戦後の80年』と伊藤さんが前に私との対談でも言っていましたけど、悔しいけど違うっていう風に、全員が全員とは言いませんけども、そういう風に答えられなくなってしまった日本があるんじゃないかと。

今、選挙中ということもありまして色々な争点が出ていますけども、今日は、日本をもう一回、考えてみたい。別に目立つことはなくても、しっかりした誇りある皆さんから敬意を持たれる国であって貰いたいという気はしている訳でございます、そういう意味で、この今の日本の在り方、もっと言うと、本当にグローバリズムという言い方の徹底した状態が今、日本に来ているんじゃないかというような気も致します。

皆さんの見識、或いは、日本論ですね、こういったものを皆さんと共に話し合ってみたいと思います。今日はリモートではお二人のご参加ですけれども、まず、ご出席の皆さんをご紹介します。室伏政策研究室代表、政策コンサルタントの室伏謙一さんです」

室伏「宜しくお願い致します」

水島「室伏さん、ついに一番、年齢の高いところに」

室伏「いやあ、こんな所に座っているのかなあという何かねえ…」

水島「リモートの用田さんが年上ですけど、まあ、こういう時代になって来たなあと思います」

室伏「石破ほどではないですが、ちょっと落ち着かない感じが（笑）」

一同「（笑）」

水島「分かりました。宜しく申し上げます」

室伏「宜しく申し上げます」

水島「作家の宇山卓栄さんです」

宇山「宜しくお願い致します」

水島「歴史学者で麗澤大学国際学部准教授のジェイソン・モーガンさんです。宜しく申し上げます」

モーガン「申し上げます」

水島「そして千葉県議会議員の折本龍則さんですけれども、今、向かっている途中で渋滞に巻き込まれたと連絡がありました。あと15分ぐらいで到着するだろうと言われていています。そして今日はリモート出演でございます。筑波大学システム情報系准教授の掛谷英紀さんです。宜しくお願いします」

掛谷「宜しくお願いします。いやリモートで良かったです、もしスタジオだったら、あの西部席に私が座らなきゃいけなかったのです。ホッとしております」

一同「(笑)」

水島「なるほど(笑)、はい、そういうことですね。それから九州にお住まいになってます元陸上自衛隊西部方面総監、陸将の用田さんですけども、今、別の闘いの最中でリモートと取っ組み合いをしています。何とか通じるように頑張っているようですので(笑)、間も無く通じるようになりますのでお待ち戴ければと思います。

早速ですけども『世界から相手にされなくなった日本の現実』、マルコポーロの頃はジパングと言われて、昔は黄金の国、実際に金も銀も相当、出ていたということで、大量の金と銀が日本から持ち出されたという、本当の意味でのジパングでもあった訳ですけども、この我々の国は何処へ漂流していくんだろうという気がします。今の日本のことを、感想も含めて、皆さんに…あ、用田さん、聞こえますか。用田さん」

用田「で…」

水島「用田さん、聞こえますか」

用田「はい？入っている？」

水島「ああ、入っていますよ。はい」

用田「はいはい、はいはい」

水島「ああ、良かったです。じゃあ、改めましてご紹介します。元陸上自衛隊、西部方面総監、陸将の用田和仁さんです。宜しくお願いします」

用田「お願いしまあ～す」

水島「未だ何となく繋がり難くなっていますけどお願いします。ということで、じゃあ、室伏さん…」

用田「すみません、中々使いこなせないもんですから」

水島「はい。聞こえていますから大丈夫ですよ。画も映っていますし、今のところ、全く問題はありません」

用田「これでいいの。大丈夫ですか」

水島「はい、大丈夫です。オッケーです。宜しくお願いします」

用田「あ、すみません、機械に弱いもんですから申し訳ございません」

水島「もう大丈夫です。戦車部隊の司令官だった（笑）元西部方面総監、陸将の用田さんです。宜しくお願いします。では早速、本題に入りたいと思います。室伏さんから、このタイトルの問題ですけどね、日本について、どんな感じを持っていますか」

室伏「はい。フリップが未だ出来ていないので、石破の政策が、いかに、どうしようもないかっていうところを聞いて貰おうと思ったので、それは、あとに置いておきたいと思います。結局、これまで世界第二の経済大国と言われた日本が今、どんどん転落して、その内、インドに抜かれるだろうと言われています。何故、こんな状況になったのかと言ったら、まず、私的な話で申し上げれば、やっぱり経済政策の失敗ですね。投資不足、投資と言っても企業ではなくて国が投資して来なかったと」

水島「うん、うん」

室伏「つまり、本当だったら、もっと繁栄出来ていた日本を、国が態々繁栄しない国にしたと。尚且つ、今、あの財務省という頭の悪い人達の集団は何をやっているかって言うと、とにかく人口減少は、もう放置でいいんだと。減っていいと」

水島「うん」

室伏「インフラの更新もしません。インフラの新しい投資もしません。地域が疲弊します。もうインフラが朽ちて使えなくなりました。放置。生活できなくなる。でも、そこに住んでいる貴方達が悪いという発想」

水島「うん」

室伏「それが今の財務省ですね。だから堂々と、能登地震が起きても、能登地震の復興もやらないという風な、まあ、それは石破政権の政策に如実に表われている訳で、まず、それがあります。しかも経済政策っていうのは確かに各国共、新自由主義政策をやって大失敗をしたんですけど、失敗したら失敗したで修正をしている訳ですね。解り易い例で申し上げれば、国鉄の分割民営化というものを日本がやりました。発祥はイギリスですけどもイギリスは大失敗をした訳ですが、イギリスは、どうしたかと言うと、今、国営に戻すべく動き始めています」

水島「そうですねえ」

室伏「最終的には全部、一回、国営にするんですけど、まず状況が酷いヨークシャーとかリバプールですね、そういったところから、まず国有化をして、最終的にそっちへ持って行こうということをやっている。だったら日本だって、例えば、まず北海道と四国から、これを国営化しましょうっていうことは出来るんですけど、やる気は全く無いと」

水島「うん」

室伏「最終的に株式会社だから売ってしまえという発想、採算が取れないんだったら要らないという発想で、つまりインフラっていうものを採算ベースで考えるという、国にあってはならないような考え方をしていると。だから、そんなことをやっておれば、ジャパン・バッシングっていうのは、要は、例えば、日本で色んなモーターショーをやっていたのに、どんどん会社が出なくなって、北京は凄くやるんだけど、日本って、どんどん小さくなって来ていると。まあ、当たり前ですよ、だって日本が発展しない国なんだから、車が売れない訳だからやってもしょうがないと。

それで、あと貿易で言えば、例えば、日本に巨大なコンテナ船なり貨物船で持って来たとしても停泊できる所が少ないということになると、じゃあ、一回、上海へ行きましょう」

水島「うん」

室伏「釜山へ行きましょうっていうことになって、日本は、そこまで態々行って買うので高いものを買わされるっていうことになっていると。ところが、ですよ、ところが本当は、それをやらなきゃいけないのに、日本は何をやって来たかって言うと、大型クルーズ船用の岸壁を造ると」

水島「う～ん…」

室伏「でもクルーズ船が来ても来ただけで何も儲からない訳ですよ。私は去年、長崎に行きまして、ちょっとずつ見ていましたけど、結局、彼らってクルーズ船の中に泊って、そこで食事をするので…」

水島「そうなんですよ」

室伏「観光地に行く時の入場料とか、あと、ちょっとお菓子を食べるとかソフトクリームを食べますとか、それぐらいしか、お金を使わないんですよ。だから、全然、意味が無いって言うか費用対効果でね、財務省というところが大好きな費用対効果を考えても全くペイしない訳ですよ。それなのに堂々とそういうことをやって、つまり、今、必要な事じゃなくて、必要のない事、むしろ日本にとってマイナスになるようなことばかりやっていると、それをやってきたっていうことがありますねと」

水島「うん」

室伏「まあ、やはりターニングポイントになっているのは、やはりバブルが崩壊してからですけど、バブルだって、あの時の真面目な日本政府が累次に渡って経済対策をやった結果として日本が発展しました。つまり積極財政、減税で発展したという正に良い例がバブルですね。ただバブル経済になった時の対処方針、また、これも政策の失敗ですけど、間違ったからバブル崩壊後、まあ、なった訳であって、別に日本が悪い訳でも何でも無いんですけど、日本が悪いんだと。日本的なるものがあるから駄目なんだっていうことで、自ら否定をするのが90年代から流行りましてね」

水島「流行りましたね」

室伏「僕なんか勉強会に行っても、もう日本否定合戦をする訳ですよ」

水島「うん」

室伏「SNSでも、何か日本否定の大喜利みたいになって、何故、貴方は自分の国、日本をそこまで否定したがるのですかと。否定するんだったら政策が失敗したとか、この国会議員が駄目だとか、財務省が駄目だとか、経産省が駄目だとか、それを言えばいいんだけども、しかも、そういうことをやっている中にキャリア官僚が居たりする訳ですよ」

水島「うん」

室伏「そういう状況に居ると、日本否定のことを言わないと、日本を肯定するようなことを言うと、何か凄く変人扱いされると」

水島「うん」

室伏「だから、そこまで日本人が腐っちゃって、日本の本当は国政を動かすような、経済を動かすような人達がそういう頭になっている」

水島「うん」

室伏「何故、そうなったんですかって言うと、やはり、これはドーア (Ronald Philip Dore) が言っている、所謂、洗脳世代ですね」

水島「うん」

室伏「アメリカに行って、アメリカ的なものがいんだっていうことを摺り込まれて日本に来てそれをやる」

水島「うん」

室伏「それをやっているのが今、役人の、そのあと幹部になったりとか企業の幹部になったりとかしているんで、そうなってしまっているという風なことがあるんですけども。あとは教育を通じた日本人とか日本の破壊ですよ」

水島「うん」

室伏「日本っていう国を考えようとか、そういったことをしちゃいけないんだと。そうするのが駄目なんだ」

水島「そうですね」

室伏「日本否定の教育をする。明確にGHQがはめ込んだプログラムで、その実行部隊が日教組」

水島「うん」

室伏「これ、私は別に陰謀論とか何とか言っている訳じゃなくて、下村治がはっきりと書いている話なので申し上げているんですけども、だからねえ、昨日、今日でどうなったということよりも、この数十年、特に90年代以降、教育に於いては、戦後の80年ってありますけども、その期間を通じて日本っていうものとか日本を考えるとかというものが破壊されて、結局、徐々に相手にされない日本になってしまったっていう風なことだろうなと。ただ、もうちょっと長いスパンで見て、私は、日本っていうものの破壊の過程の一番、初めに始まったのは、やっぱり明治維新だと思っています」

水島「うん」

室伏「それは最近、これも非売品なので、ご本人から戴いたものですけど、大場一央さんという儒教の非常に良い研究者ですけども、たまたま彼と議論をした時に意見が一致したんですけど、やっぱり儒教っていうもの、朱子学とかですね、それに基づいて国体論とか、そういったものが作られて、結局、幕末によく解っていない民衆がデジマインド (デジタルマインドセット) してしまったところがあるんですけども、それを明治でもって、断絶してしまった。

江戸時代を否定するとか江戸的なものを否定するとかね、そういう悪癖がついてしまったってところから、やっぱり世界に相手にされなくなる日本、まあ、坂を転げ落ちる日本が始まったんだらうなっていうことですけど、今日的に直接的なのは、やっぱり戦後であり、バブル崩壊後っていうことになるのかなという風に思っています。今、フリップがやっと来ましたので、また、あとで話をしたいと思います」

水島「ああ、じゃあ、また、あとで宜しくお願いします」

室伏「はい」

水島「今ね、丁度、明治維新の話で言うと、いつも言うんですけど、明治維新で皇室の祭祀の中から儒教の部分と仏教の部分が全部、消されたんですね」

室伏「はい」

水島「所謂、水戸学派的な、神道って本当はイデオロギーやそういうものじゃないんですけどもイデオロギー化した。皇国史観イデオロギーとかね。ある種の、そういうものとして替えられたっていうことで、つまり神道の大変雄大な深い自然観、そして、世界観と仏教の哲学、それから儒教の教えは、いかに行くべきか、生きるべきか、こういうものを総合的にもったので、実は江戸の思想というのは非常に深い、或いは、皇室の在り方自体が根本的なものとして大事な儒教的な朱子学中心ですけど、強いものがあつたのにも拘らず、そういうものを全部、捨てた。

それから仏教も全部、廃仏毀釈で捨てた。結局、神道自体の大らかな深い自然観も、はっきり言うと捨てちゃった。明治の近代化を選んだ形で、結局、イデオロギー化してしまった神道。こういうところが明治維新で進められたっていうことを私も思っているんですけども、今、ここの部分をおっしゃって戴いたと思うので…」

室伏「(頷く)」

水島「これが無くなった日本には、一体、何があると言うと、今のここへ来るということですね」

室伏「だから、それが今だけ、金だけ、自分だけにも繋がって来ますし…」

水島「はい、そうですね」

室伏「つまり、まあ、そうなのは明治以降で、その正に南洲翁遺訓の中から始まる訳じゃないですか」

水島「うん」

室伏「そこから始まるような状況になっちゃっているっていうのがありますし」

水島「そうですね」

室伏「それが、あの芥川龍之介の『ぼんやりとした不安』というか、要するにそれが無いのに、それをどうしたらいいかって探していて、結局、見つからなかったっていうことですよね。だから、その…」

水島「何か、そこはかたない不安というね」

室伏「ええ」

水島「確かに、今、おっしゃる、そこだと思いますね。はい。こういう日本を、そこから根本的に考えなきゃいけない。というのは選んだ近代思想が今、実はヨーロッパ自体が、その近代主義的なフランス革命や色んなものを否定し始めている。或いは、崩壊し始めている。そういうものも見なきゃいけないっていうことがあるのに、今の日本の思想界は、実際、本当にそうかどうか。宇山さん、お願いします」

宇山「はい。今日は、タイトルが『世界から相手にされなくなった日本の現実』ということでもありますけども、私達が世界から相手にされなくなったという、それを一番、感じるのは海外に出て行った時ではないかなと思うんです。

例えば、海外の現地で売り子さん達が、私達にニイハオという風に声をかけてきて、いや、違う、私達は日本人だからコンニチハだというように返すと、その売り子さん達がプイッと向いて、なんだ日本人か、ケチな奴らだということでソッポを向くということが、よくある訳ですね」

水島「ああ〜…ああ、そう。その話、凄いね」

宇山「ええ。ニイハオと言われてニイハオで返すと、はい、どうぞ、こちらへいらっしゃいと言って通して戴けるんですが、日本人が、いやあ、日本人ですなんて言うと、本当に相手にされないというようなことが、東南アジアを始めとするアジアの国々では起こっているというのが現実ですね。

最初、冒頭にトランプ大統領の視点で、今の日本の現状を読み解いてみたいんですけれども、私は、このトランプ大統領という大統領は、一言で言うと『八百長大統領』だと思います」

水島「なるほど」

室伏「(笑)」

宇山「例えば、この前の中東の紛争ですが、イランの攻撃の出来事を見ても、トランプ大統領はイランに攻撃をする際、事前に通知通告を行っていた訳です」

水島「うん」

宇山「一方、イランがカタールにあるアル・ウデイド空軍基地を攻撃する時にも、アメリカに対して事前通知を行っていた訳です。イランもアメリカも互いに事前通知をし合って攻撃をし合うという八百長試合、プロレス試合が大好きな大統領です。まあ、プーチン大統領との関係に於いても様々な八百長プロレスをやって見せている、謂わば、パフォーマンスな訳ですね」

水島「うん」

宇山「そのトランプ大統領が8月1日に、日本に対して25%の関税をかけるぞと言って、まあ、昨日、書簡を寄こして来たということについて、石破総理がブチ切れたということで、つい昨日でしょうか、船橋市で、日本を舐めるんじゃないと、『舐められてたまるか』というような発言をしたということが報じられておりました。もう一つは、小野寺政調会長が、このトランプ大統領の書簡を受け取って日本が舐められていると、けしからん

奴だと言って、トランプ大統領を批判したというようなことがあった訳ですが、こういう形でトランプ大統領の八百長に一々真面に引き合いにして、それを請け負うということ自体が、全く外交を知らぬ人間のやり方ではないかという風にさえ思う訳です。

向こうが八百長して来て大風呂敷を広げるならば、こっちも大風呂敷を広げてやればいい訳です。例えば、アメリカが今、防衛費をGDPの5%に引き上げなさいというような圧力をかけていますが、しかし、いや、大統領、我々は5%では済みませんよと。10%ぐらい防衛費をかけるんですよと。宜しいですかというぐらいの大風呂敷を、出来るかどうかは別ですよ。そのぐらいのことを言えばいいと思います」

水島「うん」

宇山「更には第7艦隊だって日本が買うぞと。更には核武装をするから宜しくな、というぐらいのことをトランプ大統領に言ってやればいいだろうと思います」

水島「そうですよ」

宇山「そこを米が、いくら買えとか、大豆を買え、トウモロコシがどうだとか、アメ車をどれだけ買えとか、そういう細かい話を、担当者と赤沢さんがゴチャゴチャと話をするというようなことばかりに終始しているから、物事が何も前に進まない訳ですね。或いは、そもそもトランプ関税というのが中国を包囲するという大戦略の下に執られているならば、日本の首相が、じゃあ、我々は中国とのデカップリングを徹底的に進めますと。

今、中国と付き合いのある企業にはデカップリングをしないならば制裁をするというぐらいの思い切ったことを言えば、トランプ大統領も、おおそうかと、石破も中々やるじゃないかと言って引き下がってくれると思うんですが、それを全然せずに、赤沢ばかりに責任を押し付けて、首相が逃げ回っているという嘆かわしい現状だろうと思います。

まあ、ベッセント長官が19日、選挙の前日に日本にやって来るということでありますが、私は、これが最後のアメリカとの交渉の機会になって来ると思います」

水島「うん」

宇山「ここで石破首相がアメリカに対して思い切った提案をしていかない限り、もう決定的にアメリカの敵対国になって行くだろうと思います。森山幹事長が先般から馬鹿なことを言っているんですね。パンダ外交だと。日本にパンダを送って欲しいっていうことを、必死になって何立峰（かりつほう）副首相に対して言っているということが、もう、これもアメリカのトランプ政権から見たら、敵認定されるというような事柄だろうと思うんですね」

水島「うん」

宇山「もう一点、申し上げたいのが今日のテーマは『世界から相手にされなくなった日本の現実』ですが、実は日本が非常に相手にされている勢力というのがある訳ですね」

水島「うん」

宇山「それは不法移民の皆様方であります」

水島「(笑)」

室伏「(笑)」

宇山「彼らはストーカーの如く日本に執着して、どお～しても、日本を相手にしたくて、居座ろうとしている人達ですね。今、選挙が行われておりますが、埼玉では、特に、Kの付く民族の人達が大変な問題を引き起こしている選挙区でございますけれども、この選挙区の候補者達、例えば、自民党、立憲民主党、国民党が揃って、こんな移民問題、外国人問題なんて優先順位が低いなどと言うようなことを堂々と宣っている訳です。

それから、れいわ新選組も態々訴える程、重要な事じゃない等というふざけたことを言っているし、共産党は、もっと酷いですよ。そもそも、こういう外国人問題を選挙で取り扱うということが差別なんだというような言い方さえしている訳です。都議選を振り返ってみると、千代田区で無所属の女性候補が当選したと。この彼女が訴えていたのは、移民問題ですね。千代田区は今、中国人が高級マンション等を買って漁って、そして管理組合の運営が成り立たないということで、千代田区民の皆さんは深刻に中国人移民の問題を取り上げていらっしゃる。その危機感が都民ファーストの候補に票を向かわせずに、この無所属の女性候補に票を向かわせたという、この事態を、私は重く見るべきだろうと思うんですよ」

水島「そうですね」

宇山「私は、この参院選挙に大きな争点があると。この移民問題、外国人問題をどうするのかということ、やはり有権者に問うていくという絶好の機会なのに、既存政党の人達が、いや、そんなものは大した問題じゃねえというようなことを言う。

私は、日本保守党なんて全く支持をしませんけれども、百田尚樹代表が外国人はルールを守らないという言い方をすると、一斉にメディアが、それに噛みついて、それはヘイトだ、それは差別だと言って百田叩きをするという嘆かわしい現状な訳ですね。今の既存政党達がメディアと、こぞって移民受け入れ、外国人受け入れをしているということに対して、実際に生活をしている我々市民の悲鳴に似た声が聞こえないのかということをお願いしたい訳です」

水島「はい。これは、また議論になると思いますけど、昨日、一昨日と、実は、福井義高さんと対談しました。これはモーガンさんが嫌いな雑誌、拝米に載ったもので、こういう記事も時々書くんですよ」

モーガン「でも、福井先生は大好きです。(笑)」

一同「(笑)」

水島「はい。『国民を富ませない移民の経済効果』今、言ってくれたんでね」

宇山「はい」

水島「非常にいいんですけど。それと、もう一つ。去年、一昨年と一回ずつ書いている。『人手不足論のまやかしの市場重視』ということで、何を言っているかって言うと、これは基本的にハーバード大のジョージ・ボーハス (George J. Borjas) という教授のことです。メインはこれですよ。『移民受け入れは自国民の所得増を伴わない』、いいですか、これは凄く大事な事です。

『格差を拡大する所得再分配政策である。勝者は企業とエリート。敗者は一般国民』。つまり、これねえ、今、せっかく言ってくれたので一応、紹介しますけど、チャンネル桜の友の会や二人委員会の皆さん、或いは、くにもりやサロンとかの会員全員に、このURLをお送りします。

つまり何かって言ったら、移民を入れるっていうのは、今言ったそういうトラブルの問題が凄くあるし、文化的なこともあるけれども、決定的なのは、移民を入れると、経済的にどうなるかって言うと企業は儲かる。安い労働力とかで、まあ、そのエリートっていうか株主や役員は儲かる。しかし競合する国民は全部、貧乏になっていく。そこからお金が移民の方に回って行く。

それと、もう一つ、企業は、それでいいかも分からないけども、移民というのは人間ですから病気もすれば、電気も使う、ガスも使う、水道も使う、飯も食う。住宅も取る。土地も買う。実は、こういう費用が移民一人に物凄くかかる。このことを全然、計算されていない。だから文化的な事は勿論、今、おっしゃったようなトラブル、クルド人で起きているけれども、実はこの問題は、決定的に経団連とかそういう連中のやっているのが再配分。

日本人を貧乏にする政策だから、おっしゃったようにれいわ新選組も立憲民主も国民民主も共産党も社民党も全部、本当は労働者の味方というなら移民は絶対に反対しなきゃいけない。ゼロとは言わないけれども、基本的に移民を入れて得な事はひとつも無い。実に詳細に、この二つを指摘しているのは是非、お読み戴きたいと思う。

実は一昨日、彼と話をしてね、こういう明確なことがあるんだということで、私も移民の問題について色々な反対論を、ずっとやってきましたけども、これは決定的だと思います。いいことをおっしゃって戴きました。この問題は我々の国が未だに移民政策を続けようとしていることです。はい、どうぞ、はい」

宇山「今、社長がおっしゃって下さった様に、実は病院へ行くと外国人だらけなんです」

水島「そうなんです」

宇山「私は先月、地元の福岡に帰りまして母の介護で病院に付き添うと、何と周りに居るのは全部、外国人で、検診を受けていたり、何かケガをしたとか言って、まあ、外国人に病院が席卷されていると」

水島「そうなんですよ」

宇山「その続きで、介護の関係で母に付き添って役所に行ったんですけれども、その役所の窓口も今、外国人しか居ないんですよ。今や役所の窓口は、何と中国人が担当しているんですね」

水島「ああ」

宇山「日本人が担当していなくて、中国語が解る中国人が必要だということで、役所の中に雇い入れられていて、役所の書類等を自由に閲覧できるような権限まで持たせているという現状な訳ですね」

水島「全くその通りです」

宇山「はい」

水島「この中でオランダの例を挙げて詳細に説明しているんですけど、開発途上系と言うか、G7の国は経済的な違いが無いから、それ程、負担にならないけど、オランダの場合は1人7千万って言いましたね。開発途上国から来た移民のコスト。それで面白いのは、全ての国を調べてみて、入国して来て得になった国民は何処だって言うと、日本国民だって言うんですよ。

日本国民がオランダに移民で来ると、オランダに経済的なプラスを与えると。他の国は殆ど居ない。特に開発途上国って言うか、そういう格差の違う国から来る人達の大部分は、自分の国が苦しいから外国へ行くんだけどね。とにかく完全に、その国の労働者と利害がぶつかる。そこの労働者から、ふんだくったものを、そっちへ回すっていうのが再配分の政策だと。だから極めて人手不足なんか大嘘だっていうね。

例えば、この例を挙げていましたけど、美容師の場合。物凄く収入が値上がったんですよ。美容師は人を触ったり、髪の毛を触ったり、刃物を使うという仕事ですから、あまり代わりが居ない。こういう職業、実際、介護も、移民を入れなければ、もっと値段も上がって、介護職に就く人達もどんどん増えてお金が回るようになる。

だから、これが実行されていなきやいけないところですけど、日本は移民を入れて、日本人の働く人達が益々お金をふんだくられるようになるので、今、おっしゃってくれたので良かったと思うんですけども、移民の問題は、本当に日本の問題の中で一番、大きな問題ですよ

宇山「そうですね」

水島「はい。ということで有難うございます。ではモーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。有難うございます。ちょっとお節介のことを言っていていいですか」

水島「はい、はい、どうぞ。はい」

モーガン「多分、掛谷先生と折本先生とは年齢が大体、ほぼ、ほぼだと思うんですけど、用田先生の前に発言しては、ちょっと失礼だなと思って」

水島「いやいや（笑）」

モーガン「ちょっと譲って…」

水島「そんなことありませんよ。大丈夫でしょう」

モーガン「用田先生、いいですか」

水島「はい」

モーガン「もし良ければ…」

水島「はい。お願いします」

モーガン「私があとに」

水島「いえ、いいです、いいですよ。大丈夫ですよ。うん、リモートだから返って余計な準備もあると思いますから、モーガンさんから言って載って構いませんよ」

モーガン「ああ、そうですか」

水島「はい。大丈夫です。有難うございます」

モーガン「すみません。じゃあ、失礼致します。移民問題は先程、室伏先生もおっしゃいましたけれども、移民問題で考えると、この場で言おうと思ったこととほぼ一致します」

水島「うん」

モーガン「私の考えでは、この日本は、もう80年前から自称エリートが日本人を諦めていて、日本人がみんな絶滅しても大丈夫かと思っている人に支配されていると思います。それは米と手を組んで、この日米同盟はどういうことかって言うと、日本人が要らないということが大前提だと思っています」

水島「うん」

モーガン「地方に行けば本当に外国人だらけで、日本人のお爺さんとお婆さんが、ちょっとだけ残っていて、本当に涙が出る程、非常に悲しい事で完全に見捨てられています。で、何故、日本が世界から相手にされなくなったかと言うと、私は3つの問題があると思っています。一般に言えばフィルター問題があると思います。日本国内からすれば、日本人の常識と世界の常識、白人の国を取り除いて、世界の常識と日本人の常識は、かなり似ているっていうことがあります。でも日本国内からすれば孤立しているってような報道ばかりですので、態と希望を失うように、そういった報道が多いと思いますが、メディアとか政治家、評論家、あと自称エリートは嘘ばかりついていて、道徳的にも墮落していて、でも、そのフィルターを取り除けば日本人は未だ、かなり健全で戦えば勝つ」

水島「うん」

モーガン「私は確実に、そう思っているんですけども、本当に上の数人だけを拭けば、他の人々が戦って、世界では大成功できると思います。まずフィルター問題を言わなければならぬのは、自民党ですね」

水島「うん」

モーガン「本当に人類史を探しても、その様な組織は多分、無いだろうと思います」

水島「うん」

モーガン「反日テロ組織に過ぎない自民党。この70年間、ずうっと自民党が米の為に、この日本で支配をして来たんですけども、他の国ではワシントン帝国に反発して、自分の国を守ってきた国がいっぱいあるんです」

水島「うん」

モーガン「例えばイランとかエジプト、ベトナム、キューバ、北朝鮮、アフガニスタン、グアテマラ、コンゴとか、ブルキナファソ、あとアメリカも同じです。アメリカもワシントンに反発してトランプがその指導者だったのが、ちょっと反逆者になっちゃって、それ

は別の問題ですけど、殆どの世界はワシントンの本質が見えています。日本人だけと言うよりも、自民党だけ、まだまだワシントン帝国、頑張っています」

水島「うん」

モーガン「どれ程、自民党が日本人を嫌いかって言うと、この間、鶴保庸介っていう人が運良く能登半島で地震があったと、そういうことを言うか」

水島「ほんと、そうだねえ」

モーガン「自分、政治家も別ですけども自国について、いやあ、色んな人が困って死んで良かったなど。運が良かったという発言をするぐらい、石破茂総理大臣が北海道から北方領土を除けば日本一とかと言って…」

水島「それも言ったねえ（苦笑）」

モーガン「ね」

水島「そうだね、石破君」

モーガン「江藤拓という農林水産大臣は米を買ったことが無いと。日本人が飢え死にしても、どうでもいいと思っている人が米問題を担当している」

水島「まあ、思わず出てしまうんだねえ」

モーガン「そうですね。それで高市さぎえ、あつ、ごめんなさい、高市早苗っていう人がLGBT法案を可決して、要は日本の子供は、性的虐待されてもオッケーと思っています。完全に日本の子供を犠牲にして、自分のキャリアを優先した高市」

水島「うん」

モーガン「今になっても高市早苗を支持している人とか、自民党を立て直したいとか未だに自民党に残っている人が居ます」

水島「うん」

モーガン「岸田文雄は、日本がアメリカのグローバル・パートナーだと言って、もう関税ぶりを見て、アメリカからすれば日本はグローバル・パートナーでしょうか。それとも、見捨てられていることが明らかになっているんですけども、まず自民党を一掃して、日本人が相手にされなくなっている状態から出て自由になると思います。あと、もう一つの問題は、日本国内の軍産複合体だと思えます。とある防衛系の研究所があって、そこに関わっている白人は最近、本当に気が狂っている事を言っています。

もっとイラン空爆をやればよかった。もっと、やって欲しいっていう白人。因みに、同じ白人が台湾を巡る戦争を応援しています。そのような戦争が勃発すれば、日本人が大勢、死ぬ訳ですけども、ワシントンの人は死なない。あとは同じ防衛研究所に関わっている元国務省幹部」

水島「うん」

モーガン「まあ、沖縄の人がゆすりの名人だと言った人、そういった人が日本の日米同盟や日本国内の防衛のアドバイスをばら撒いている人間です。日本人がそれに耳を傾けてい

て、ああ、なるほどと言っている訳です。あと産経新聞とかジャパン・フォワードとか、キンブリー・ケイガン、戦争研究所の死の天使、あの極悪女とインタビューをして、武器製造大手会社から支援を受けていると、何も言わない。もう日本人が戦争ビジネスを日本人に売っている訳です」

水島「そうだねえ」

モーガン「日米同盟とか、あと Foreign Military Sales、これ、原口先生がおっしゃっている Foreign Military Sales とか、エルブリッジ・コルビー (Elbridge Colby) が防衛費を5%、GDPの5%まで引き上げということを出したようで」

水島「うんうん」

モーガン「全世界は本当の事が見えているんです。永田町はワシントンのポチに過ぎないです」

水島「うん、しっかり見えているね、はい」

モーガン「本当に、みんな、見ているんです。みんな、もう解っているんです。残念ながら見えていないのは、日本国内の国民の一部だけ」

水島「そうなんですなえ」

モーガン「あと自民党とか産経新聞、正論とかそういった嘘つきの集団の人々、見えていると思うんですけども、ポジションを保護する為に態と言っていない」

水島「うん」

モーガン「最後はメディアです。もう言わなくていいと思いますけれども、例えば、産経新聞とかサギレンコ、日本国内のウクライナ人が産経新聞とか月刊拝米とか、あの様なこと、場所に、プーチンがヨーロッパとか全世界を支配しようとしている、覇権を取ろうとしているとかといったファンタジーを繰り返して言っていて、そんな根拠はないです」

水島「うん…」

モーガン「プーチンが全世界を支配したいとか、3年経っても未だウクライナに入ったばかりの状態、何処が全世界の覇権を取りたいとか、未だに平気でそのような嘘を言うメディアを一掃しなければならない。

最後にNHKですね。最近、給付金が問題になっているんですけども、自民党が焦っていて、選挙前に、お金をばら撒いて、私達の金なのにね、国民のお金をばら撒いて、お願いしますと。清き一票をお願いしますと、もう明らかに焦っているんですけども、それより簡単な方法としては、NHKの受信料の義務を廃止すればいいじゃないですか。

最近、見ている「あんぱん」ですけど、英霊を侮辱している。NHKが毎日、態と繰り返して、頻繁です」

水島「朝ドラですね」

モーガン「頻繁です。あの朝ドラ。毎日の頻度で英霊を馬鹿にしています。侮辱していますよ」

水島「本当にそうですね」

モーガン「それがNHKですよ。国民が払っている受信料、それは高いと思います。それを廃止すれば給付金よりもいいと思います。一石二鳥ですね。お金が財布の中に留まる。NHKが無くなる。もう中国以外の全世界が喜ぶと思いますね。多分、松岡洋右の時期が来ていると思います。国際連盟を脱退した松岡さん」

水島「はい」

モーガン「私は、その判断が合っていると思います。もし、当時の実情を考えれば、もう本当に人種差別が半端なものじゃなかったもので、これ以上、話し合っても意味が無いので脱退すると。日本国民が反日テロ組織の自民党とかって、その国内の体制から脱退すればいいと思います。日本国民一人一人が松岡洋祐になって、じゃあ、もう、これ以上、侮辱されるつもりは無いですと言って脱退すれば、じゃあ、何処に入ればいいかと。それは、BRICSだと思います。BRICSです。BRICSは常識の連名で、日本人の常識に、かなり近いことが語られている場で、100%はそうでもないですけども、せめて、米を敵にして、もう米は敵だから、その米の帝国を終わらせようとする勢いに乗って、世界と一緒にもっと良い未来を築けばいいなと考えています」

水島「うん」

モーガン「そうすると、日本がもう相手にされなくなっている状態から出て、世界のリーダーになると思いますよ。でも、まず一法としては、米を、この聖地、日本から追い出さなければならぬと思います。以上です」

水島「そうですね。やっぱり、そういう意味で、一部の国、まあ、我々は言っていますけれども、やっぱり外国人の基地を、まあ、明日とは言わないけどもね、引き揚げて貰うんですよ。有難うございました。どうぞお帰り下さいってね。そういうことも含めてねえ、あると思いますね。そういうことの一つの象徴的なことが沢山、あると思いますね。

今、モーガンさんが言ってくれたことは、非常に問題提起が根本的なところなのでね、これは、また皆さんの意見も聞きたいと思います。はい、有難うございます。では、大渋滞に巻き込まれて遅れました折本さん」

折本「どうも宜しくお願いします」

水島「はい、宜しくお願いします」

折本「失礼しました」

水島「千葉県議会議員の折本龍則さんです」

折本「はい」

水島「今、冒頭に、それぞれ、みなさんに、今の日本の問題について、どう思っているかということを知っているんですけど」

折本「はいはい」

水島「はい」

折本「ああ、そうですね。一昨日が安倍元首相の三回忌と言いますか、ご命日だった訳ですけれども」

水島「そうですね」

折本「はい。結局、トランプにいいようにやられて、石破だから上手くいかなかったんだとか、赤沢さんだから上手くいかなかったんだという風に言われていますけど、もし安倍さんだったら上手くいっていたに違いないと言われますが、私は、そんなことは全く無いという風に思うんですね。やっぱり自民党っていう政党が、ある意味で、対米従属政党なので…」

モーガン「(頷く)」

折本「別に誰が総理総裁になろうが、結局、同じように馬鹿にされて捨てられていたんだろうなという風に思います」

水島「うん」

折本「結局、安倍さんなら上手くいっていたかもしれないと言われますけども、先程、外国人の労働者の話とかもありますけれども、安倍さんの7年半の間に外国人労働者の数が70万から170万ぐらいまで増えていますね。100万人ぐらい増えている訳です。去年、労働者の数が、もう230万人ぐらいになって、前の年より30万人も増えている。物凄い勢いで増え続けているということですね」

水島「はい、その通りです」

折本「まあ、それなので、結局、自民党がグローバリズムの中で新自由主義政策を行って、外国人労働者をどんどん受け入れてきたという、この一つの延長に、今日がある訳です」

水島「うん」

折本「別に安倍さんだったらとか、或いは石破だから駄目なんだとか、そういう話ではないのかなという風に思います」

水島「うん」

折本「結局、自民党も保守政党を語っていますけれども、実際には、こうやって、新自由主義で、どんどん外国人を入れて、要は、立民だとか、れいわとか、まあ、共産もそうでしょうけども、リベラル勢力が市民権を与えていくっていう、一つの共同正犯だと思うんですね」

水島「うん」

折本「原因を作った下地、温床を自民党がつくって、それで入って来た外国人に対して、多様性だ何だとか言って、そういうリベラル派の人達が権利を付与していくっていう、だから一緒になって、そういう悪事の加担をしていると。私の地元も何年か前、民主党政権の時に自治基本条例っていうのを通しましたけども、ポコポコですね」

水島「うん」

折本「自治基本条例って、外国人に住民投票資格を与えるような条例を通して、それで、自民党が、ちょっと待て、自治基本条例とかってやって、結局、外国人参政権は危ないとかって言うけども、でも実際に外国人をどんどん入れているのは自民党な訳じゃないですか。だから、もう本当に何て言うんですかね、偽善ですよ。欺瞞以外の何ものでもないなという風に思います」

水島「うん」

折本「やっぱり、今回のトランプに、まあ、ある意味、こういう三下り半を突きつけられたというの、他の国がそうやって関税を課されるならまだしも、要は、我々が戦後、これだけ日米同盟とか言って、ひたすら従属して来たのに、結局、この仕打ちは何だという話だと思うんですね。結局、韓国も25%、課されている訳じゃないですか。だから、同盟関係があるのに、何故、こんな仕打ちを受けなきゃいけないのかという、まあ、そういう理屈だと思うんですよ。

ただ、結局、今回、明らかになったのは、アメリカも、こうやって基地を置いているとは言え、まあ、言うならば憲法九条だとか日米安保の下で、アメリカは日本を守るけれども日本はアメリカを守らない。非対称な条約になっているじゃないですか」

水島「うん」

折本「だから自分の為に血を流さない奴なんかの為に、何故、守ってやる必要があるんだというのが、恐らくトランプさんの根底にある考え方だと思うんですね。ただ、やっぱり、もう一度、立ち止まって考えなければいけないのは、そもそも日米同盟っていうのは、我々を守っているんだらうかと」

水島「本当にそのところです。そこですね」

折本「そうですね。要はアメリカからすると、俺達は守ってやっているっていうように、トランプはそう思っているかもしれないですけど、でも実際には日米同盟っていうのは日本の再軍備を阻止するっていうのが、やっぱり、その一番の目的であって、そうじゃなければ横田だとか赤坂とか東京のど真ん中に米軍基地を置く必要なんて全くないじゃないですか。

だから明らかに日本が再軍備しないように、その瓶の蓋になって抑え込む為の、そういう一つの権力装置、権力機構が日米同盟の実態では無いかなと。だから、そういう意味ではトランプは根本的に誤解をしていると思います。今まで戦後日本、アメリカは一度として日本を守る為に米軍を置いたことはない。表向きは守ると言う風に言っていますけれども、ただ、実際には、自分達の世界戦略を実行する一つの拠点として在日米軍を置いてきたという話だと思います。

だから、その根本的な日米関係を今後、どうしていくのかというのは、ただ単に関税率を引き下げたら終わりなのかとかいう話じゃなくて、そもそも、もっと日本とアメリカとの関係をどうしていくのかっていうことを、根本的に考えなければいけないという地点に立っているんじゃないかという風になると思いますね」

水島「そうですね」

折本「はい」

水島「うん。はい。その問題があると思います。日米同盟っていうのは同盟でも何でもありませんけど、本当はね（失笑）」

折本「そうですね」

水島「おっしゃるようにね。まあ、この問題は本当に、これからアメリカとどうするかということを中心に考えなきゃいけないし、恐らく色々な政党がずうっと出て来て、選挙公約を見ていると解るんですけど、今、折本さんが言ったように全部、同じ穴の貉っていうのがね」

折本「そうですね」

水島「色々表現は違うけど、そのところの現実が凄いなあと思いますね。80年で我々の国がここまで来ているっていうね」

折本「あ、それと貿易に関しても、何か一方的に我々が不利益を被っているとかってトランプが言っていますが、確かに貿易収支に関しては、日本が何兆円ですか、8兆円ぐらい黒字になっているみたいですけども、でも、結局、グーグルだの何だのいうものについて日本人は、いっぱい金を払っているじゃないですか」

水島「うん」

折本「ああいうデジタルとかITだとかの収支っていうのは6兆円とか7兆円ぐらい出て行っている訳ですよ。アメリカが今まで、それこそ、自由貿易理論の中で、よくデイヴィッド・リカード（David Ricardo）とかの比較生産費説（比較優位説）とかを持ち出して来て、要は、それぞれの国の生産費が安い部門に特化して生産して、お互いに自由貿易をしていけば、お互いの国にメリットになりますよっていう理屈で、自由貿易体制を推し進め、広めて来た訳じゃないですか。その中に我々も無理矢理、入れられて来た訳ですよ、WTOを始めとした」

水島「うん」

折本「だから普通に考えると、最初は農業だったものが、どんどん第一次産業から第二次産業、第三次産業っていう風に産業構造が変換して行って、アメリカも元々は世界の工場だったのが世界の銀行になり、ITになりっていう風に基幹産業が移り変わって行くのは当然であって、その中で自動車産業だとかが衰退していくのは仕方がない、自由貿易体制の中では仕方がない話じゃないですか。

だから日本を始めとするアジア諸国とかが、それを担って来た訳であって、それはお互いの国際分業の中で、それぞれの比較優位な部門に生産を特化して自由貿易すれば、お互いが儲かるのだからって言って来たのはアメリカな訳ですよ。それを今になって、いきなり物造りを復活するんだとか言って、我々は不公正な貿易を強いられているなんて、全く現状を、今迄の経緯も踏まえてないし、一方的な理屈だと思うので、もう、そんな国と真面に付き合えないと思うんですよ」

水島「うん」

折本「自分がそうやって創りあげたルールを、今度は梯子外してやる訳ですから、そっちがその気なんだったら、我々にも考えがあるよって、ある意味、ちょっと開き直って根本

的に、じゃあ、在日米軍は出て行ってくれみたいな話にしていけばいいと思うんですけどもね」

水島「出て行って貰っても全く大丈夫だと思いますよ」

折本「はい」

水島「正直言うと、今ね、実際に海兵隊は居ませんし、武器や兵器は置いてあるけれども、実戦部隊が居ませんしね。もう、とっくにハワイや西海岸に行っちゃっているから、現実的には来るとしたら3週間ぐらい、もう3か月からも現実に戦えないですよ」

折本「そうですね」

水島「だから、そういうことも含めてね、今、おっしゃった根本的な日本の防衛の在り方ということ、だからねえ、まあ、変な言い方だけど、今、選挙で言うと、参政党とか、伸びているっていうのがあるけど、多分、当たるとは思いますけど、あれは、もうちょっと経つと1年か半年で親中になってきますよ。もう間違いなく、ああいうプリズム政党は、そうやって来ますね。反グローバリズムと反米を上手く、実際は反グローバリズムを言うグローバリズムっていう事態が起きていますから。トランプ自体も使い分けているしね。

さっき八百長政治っておっしゃっていたけど。そういう意味で色々な日本の見方を、今、提起して戴いたと思います。では、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。私が先ですか」

水島「はい。用田さんは、いつも最後にじっくり話すっていうのがご希望なので、はい。掛谷さん、宜しくお願いします」

掛谷「はい、宜しくお願いします。私の方は、どういう話をしようかと言うと、今、国際会議の出張で、まあ、国内ですけど、6月にはアイルランドに行って参りました。そこで感じた事と言うと、今の日本の若い人って本当に英語が上手になったなというのがあります」

水島「ああ、なるほど」

掛谷「日本人の存在感っていう話ですけど、今迄、日本人が、どうやって世界で存在感を示して来たかって言うと、車を売ったり、電化製品を売ったり、物で売って来たので、そうすると商社の人とか一部の人は英語を喋らなきゃいけなかったかもしれないですけど、基本的に喋らなくて良かった訳ですよ。

ところが今は情報の時代になってきてコミュニケーションの時代になって来たので、そうすると、とにかく今迄の日本人の物を造るとか器用だとかいうところだけでは中々世界で通用しなくなった中で、若い人がそういう時代に合わせて能力を身につけて来ているというのがあるので、私は本当に凄く期待できるなあと思っています。

正直言って、私と同じぐらいの世代、まあ、だから40代とか50代以上の日本人って、みんな、本当に英語が下手だったんですけど、20代30代の人には世界へ出て行っても臆さずに喋っているので本当に期待できると思います。

あと、もう一個、あるのが、この前、アイルランドへ行く時、フィンランド経由で行った訳ですけど、皆さんも体験されていると思うんですけど、物価が約倍ですよ

水島「うん」

掛谷「逆に言うと、海外の物価がこれだけ高いのに、要するに日本の円が弱くなっているのに、この状態で今迄だったら、そういう状況になると色んな物が売れた訳ですよ

水島「うん」

掛谷「でも売れないと」

水島「うん」

掛谷「私も、この前、スタジオでもお見せしましたが、丁度、新しいものを作っていて、今年度中に何とか売り出せないかなあと思っているんですけど、ただムーミンのぬいぐるみの小さいので40ユーロとか50ユーロする訳ですよ」

水島「うん」

掛谷「だから日本円にすると8千円とかで、これで8千円だったら、自分達のつくった物も結構、高値で売れるんじゃないかなっていう感覚があるんですけど、そんな中でも日本の物が世界の市場で中々売れない状況があるというところは、やっぱり何とかしないといけないなあと思っているんですけど、ただ、一方で、さっき言った通り、やっぱり若い人、日本人って平均の能力は、かなり高いと。ただ分散が物凄く小さいっていうのは日本の特徴だと思っているんですよ」

水島「うん」

掛谷「だから日本の政治家とかトップのエリートっていうのは、基本的に世界のエリートに比べて本当にレベルが低いと」

水島「うん」

掛谷「これは政治家達を比較すれば、よく解りますよね」

水島「うん」

掛谷「だから平均の強さっていうところで勝負しないといけないので、その時に、今迄、物造りっていうところに於いて平均の強さで勝負していたんですけど、そういう若い人は非常に平均の高さ、コミュニケーション力というところの能力を伸ばしてやると、コンテンツは、そもそも日本はアニメとかゲームとかでコンテンツ力があるっていうことで、そのコミュニケーション力っていうところで勝負していくと、まあ、私は、いつも、日本人はグローバル人材じゃなくて出稼ぎ人材（笑）が必要だって言っているんですけど、そういう人達が出て来そうな雰囲気を感じています。

一点だけモーガン先生に質問させて戴きたいことがあるんですけど、大丈夫ですか」

水島「はい、どうぞ」

掛谷「モーガン先生は、いつもBRICSっておっしゃるんですけど」

モーガン「はい」

掛谷「BRICSの中にはチャイナがいますよねえ」

水島「うん」

掛谷「日本は中国とは全く価値観が合わないと思っているんです」

モーガン「はい」

掛谷「その点についてモーガン先生は、BRICSに入るって言った時に、チャイナについてどう思っているかお聞きしたいんですけども」

モーガン「はい。今、答えてもいいですか」

水島「どうぞ。じゃあ、答えて下さい」

モーガン「はい、とても重要なご指摘です。私はアメリカから離れてチャイナと関わった方がいいと思います。日本人は何百年も何千年もチャイナとの関わり方を学んで来て、もうチャイナとは充分、関わる事が出来ると思います。もし米抜きであればです。チャイナっていうところはワシントンが関わると、どう考えてもチャイナの抑止とかって言うけど、それは、あくまでも米の為の抑止じゃないですか。日本の為の抑止じゃないです。

BRICSっていう存在は、私の考えでは、中国の存在感が勿論、大きいですが、理想としては全部がフラット。各国が同じような重みっていう感じで、もっと戦略的に考えると、このBRICSが7月にブラジルで会合が終わってから声明が出たんですけども、この声明の中で第104段落があるんですが、アフリカ系の方々が、奴隷貿易の事をもって賠償して貰いたいとあって、アフリカ連合がそういう声明を出しているんですけども、私は、その通りだと思っていて、奴隷制度を500年間以上やっていて、じゃあ、ごめんなさいと。それで済む訳ではないので、もうちょっと戦略的に考えれば、このようなことを使って、ワシントンの崩壊を図ることが出来るじゃないかと思っていて、奴隷制度の賠償とかを強く訴えて、そうすると米経済が、それを払っちゃったら崩壊するじゃないですか。それはワシントン帝国の終わりにも繋がります。

BRICSって、もし上手く使えばいいなあと思っていて、あと、BRICSって価値観を押し付けない、それが多分、一つの大きなポイントだと思います。BRICS、まあ、チャイナは、やっかいな存在ですけども、エマニュエル総督が来て、LGBT法案をつくってくれとやってくれば、多分、国に帰れと言えればいいじゃないですか。もっと対等的な関係が出来るのではないかと考えていて、それがBRICSの魅力です」

水島「はい。掛谷さん、いいですか」

掛谷「はい。私は中国については違った見方ですけど、またあとでお話したいと思います」

水島「はい。いいですか、じゃあ、はい。まず英語が出来るようになったっていうことは確かだけど、これも、また掛谷さんとも話さなきゃいけないけど、中味があるのかっていうことでね、語学は確かに上手くなっているからいいけれども、もっと別の言い方をすると、日本人は英語とかそんなものは必要なく良い物を出していたから認められていた。

別に英語が上手いからっていうんじゃないかね、製品が良かったっていうこともあるんじゃないかと思ったけど、これは掛谷さんと、また英語の事を話してみたいと思うんだけどね、英語もねえ、例えば、さっき言った、この福井教授は五か国語が平気なんですよね。本当に天才みたいな方で、フランス語、ロシア語ね、全部、原書で読んでいるそうです。冗談で、水島さん、貴方はドイツ文学だから、このドイツ語の本、原書で読んでみたらと言うんだけどね、本当に、こういう人も居るのね。

でも、この人は本当に中味が相当、ある人でねえ、マックス・ウェーバーの、例の労働（倫理）があるじゃないですか。私は、これを紹介したけど評判にならなかった本です。あれを全部、調べて、ひっくり返る、記録全部、ウェーバーの『プロテスタンティズムと資本主義の精神』は全く違うって論証しちゃった。そういうところがあるのでね、勿論、語学が大事だっているのはあると思いますけど、まあ、また話してみたいと思います。では用田さん、お待たせしました。宜しくお願いします」

用田「はいはい。今回のお話は『世界から相手にされなくなった日本の現実』ということですから、そちらの方面から話さないかんのですけども」

水島「はい」

用田「最初に国防の話が少し出て来ると思うので、あとから時間があれば、お話をしますけども、日米の同盟というもの、或いは日米関係というのは、アメリカ側からも含めて大きく変わって来ていると」

水島「うん」

用田「要するに床を剥がされている感じですね。全く違う。石破、或いは岩屋、林、こういう連中は、全く500年ぶりの世界の変化も解らなければ、目の前のアメリカの変化も全く気付かない。トランプがいいか悪いかって話以前の問題として、日本がどうあるべきかと。

一言で言えば、自分達の運命は自分達で決めると。そして責任を持つということが出来ているかどうかという話が非常に大きいんだろうなと」

水島「そうですね」

用田「話が変わって来ているのは、例えば、この前、ヘグセスが日本に来ましたけども、この時、記者会見で有事の際には西太平洋で最前線に立つことになる。この意味は大きい訳ですよ。前から水島社長と話をしている様に、日本は大国から見りゃあ緩衝地帯ですよ」

水島「うん、その通りですね」

用田「それが表に出て来ている訳ですよ」

水島「うん」

用田「それと、もう一つは、基地があるから俺達はちゃんと責任を果たしているんだという言い方を。確かにトランプは同じことを繰り返しているということの心底を眺めるならば、これもヘグセスが言っているんですが、日米同盟とは両国が血を分かち合って責

任を果たすタイトなパートナー、これを求めている訳ですよ。だから本当の同盟関係を求めているということに於いて、全く時代が変わっていると」

水島「うん」

用田「例えばコルビー、まあ、コルビーもそうですけども、ペンタゴンも国防費を5%に上げろよと、防衛費を上げろという話をしている訳です。見方によっては余計なお世話だと。こういう風に言った訳ですが、いやいや、先程、宇山さんがおっしゃった通り、いや、俺達は5%でも10%でも、いつでも上げるぞ。その必要性があるからねと」

水島「うん」

用田「それは何かと言うと、日本の今の防衛は、南西諸島の防衛が、やっと手厚く出来始めたというだけなんです。南西諸島の救出があるだけが、私が西方に居た時の15年前の計画を今、肉厚にしているだけなんです」

水島「うん」

用田「ところが中国は、日本海から北極海に入ろうとしている。我々はロシアを敵とすることを愚の骨頂のことだけでも、ロシアを敵にすることを言っておきながら、日本の石破には、或いは、岩屋には全然、覚悟が無い。それをやるならば、中国が北から来ているならば、南西諸島の防衛を北海道まで広げなきゃいかんのですよ」

水島「うん」

用田「そうすると、国を守る為には金がかかりますよ」

水島「うん」

用田「それからウクライナ紛争。ウクライナ戦争で一体、日本は一体、何を学んでいるんだと。アメリカは、トランプであろうとバイデンであろうと、核保有国とは戦争をしない。そういうことであるならば、ウクライナ以降、よく言われるのは、核を持っていれば、戦争は無かったかもしれん。そうだったかもしれない。

今回もイランが核兵器を持っていたらどうなのと言ったら、攻撃しなかったかもしれない。だから基本的にそういう重大な紛争地域、特に日本は正面に立っておる訳ですから、矢面に立たずに、日本は北朝鮮型の独自で核保有するフランス型にしなければいけないので、例え中東で核を持つようになって、イランは、これを追及するかもしれませんが、それは潰される可能性が非常に高い訳ですが、しかし、さはさりながら、サウジだとかトルコに核拡散をすと言っても、これはNATOのドイツにしている様に、核シェアリング、引き金はアメリカが持っているという以外に、アメリカは絶対に認めないんだと思うんですね。

だから我々がどういうタイプによって世界に広がるかということ、単なる拡散じゃなくて、イランはイランの将来を、私は読み切れませんが、少なくとも日本は独自で核を持つということをやらなきゃいけない。それから電磁ハブとか、そういうものについては、特段に金をかけて、日本中に装備がいる訳ですよ」

水島「うん」

用田「無人機、UMもそうですね」

水島「うん」

用田「これが日本中に必要ですよ」

水島「うん」

用田「だから、そうすると5%なんていうのは、あつと言う間です。チャンネル桜では今まで、ずうっと2%と言ったけども、2%の壁すら突破できない時期ですから2%と言っていましたけども、そんなもので足りるはずがない。それは日本国民が決めると。その通りです。石破君、君のやっている防衛は、頭に帽子だけ被って下は全部、素っ裸だと。これは防衛かということが全く解っていないし、トランプはそれが解っているんだろうなと」

水島「うん」

用田「所謂、嗅覚は鋭いですからね。そういう意味で、我々はそうだという。それから、もう一つは、今回、ネタニヤフがワシントンで勿論、色々なことを約束したんだと思います。一番、私がドキッとしたのはAI。AIの協定を結んだ訳ですよ」

水島「そうなんですよ」

用田「この前、最後にちょっと申し上げたように、パランティアとかIAEAだとかイギリスだとか情報機関とCIA等と一緒にしながらピンポイントで殺す、暗殺ネットワークを創った訳ですよ」

水島「うん」

用田「そして無人機だとか小型ロケットをイランの国内に於いて、それを飛ばした訳ですよ」

水島「うん」

用田「それは当然、日本でも起こるよなということです。ところが日本に於いては、もう皆さんがご承知の通り、国土は外国人に買われっ放し、だから、ああいうコンテナなんか何処でも置きっぱなしですよ」

水島「うん」

用田「それから我々が忘れちゃいかんのは、中国には国防動員法があることを、もう忘れていませんよね」

水島「うん」

用田「国防動員法があるから、彼らは軍部に服さなきゃいけない。そうなると、基本的に日本は、あつと言う間に戦場になって負けて、何が一番、やられるかと言うと弾薬庫ですよ。日本の弾薬庫は全部、グーグルか何でグーグルマップでも全部、ピンポイントで判る訳だし、何の防護力も無い訳ですよ。ネットも引いてない。一番、核心となる南西防衛の九州に一体、いくつ弾薬庫があるとお思いですか。一つです。岩屋のいる大分しかありま

せん。それも都市部にあります。こんな脆弱な体制では日本を守れるはずがない。今、言っている様に口ばかり。

だから、私が言いたいのは5%でも10%でも、それを上げなきゃいけないのであって、それは言われるがままにやるようになるんだったらやってほしい。それが基本的に、その日本の決意、覚悟が全く無い。所謂、自分達の運命は自分達が決める、そして責任を持つということ日本は全くやっていない。アメリカに逆に言いたいんだけど、アメリカもアメリカを守る為に日本に駐留している訳ですから、例えばミサイルがアメリカに飛んで来なくなったという時点で、アメリカは後退をするかもしれないという姿を、私はもしかしたら見て来たかもしれないと。非常に皮肉っていますよ（笑）。

それは違おうだろうと。だからお互いに本当にやる気があるならば、血を流さなきゃいけない。日本もそうだし、死ぬ気でやるし、国土防衛は下がることは出来ないし、ということになるんだらうなって思います。ちょっと話が逸れてしまって申し訳ないですが、国防の話からすると、日本は全然、覚悟も無ければ自分で防衛をやる気も無ければ、帽子だけ被って素っ裸の状態だということを、石破、お前は解っているのかというのが大きな問題だっている風に思っています」

水島「そうですね」

用田「はい。少し長くなってすみませんが、さっきの日本は尊敬されないっていう話に戻りますけども、ローマはパンとサーカスと言ったんですね。じゃあ、令和の今、自民党、それから公明党は一体、何をしている。パンダとサーカスと金ですよ。これで日本国民を騙せると思っているし、騙している人達も居る訳ですよ。これが今の日本。

別にトルストイが言った様な高尚な言葉でなくてもいいんだけど、トルストイが言っているのは、文化、歴史、伝統、そして国民的英雄、英霊を忘れてしまった国は、絶滅する運命にあると」

水島「うん」

用田「これが今の日本ですよ。世界が日本を見ているのは、そういうことですよ。そこまで高尚な話をしなくてもいい。でも言いたいことは、恥知らずで、そして誇りも無くて、日本人の精神、所謂、武士道の精神も無くして、大和撫子の精神も無くして、国民を守らない、そんな国が尊敬されるはずが無いですよ」

水島「うん」

用田「それが今の日本な訳です。だから、我々はこれを自覚できているかどうかという問題になると思うんですね」

水島「うん」

用田「我々が相手にされなくなった日本の現実を、よく考えると、日本は、先程、申し上げた、誇りも失った、何も失ったということで、その通りですが、GDPで2位に就いていた訳ですよ。アメリカにくっついて一生懸命、頑張っていた、みんな、働いた。しかし、私は敢えて言いますけども、いつの間にか、アメリカの日本弱体化政策に乗って日本で、みんな、働いたお金がどんどん吸い取られて行くと、今もそうですね。細かいことは

言いませんが、どんどん剥ぎ取られて、頑張った金が無くなって、税金で取られ、そういう状況の中、或いは中国に出て行って日本人が働いたお金が日本に戻せない」と

水島「うん」

用田「こんな日本が親中、そして拝米、国民をないがしろにするこの日本という国が尊敬されるはずもないし、相手にされるはずもないですよ。それを真似したいという風に思うことは全く無い訳ですから」

水島「うんうん」

用田「だから、この国民を切り捨てるというような国というものは、基本的に心を失っていく国は、国家として生きて行く価値は無いと言う風に世界から言われているし、そう思われているし、一生懸命、頑張っても誰の為に働いているのということは見透かされている訳ですね」

水島「うん」

用田「そこで、長くなってはいけませんから、二つだけ言わせて戴きますけれども、敢えてトランプ大統領が、そこまで深く考えているかどうかは別として、アメリカが行ってウクライナがロシアに対するドローン攻撃をやったことを、ルビオ国務長官は『真珠湾攻撃』という風に言ったんですね。簡単に真珠湾攻撃という言葉を使って貰うんですよ。それからトランプ大統領は今回、イランに対する攻撃で核施設に対する攻撃で、広島の場合は使いたくない。長崎の例も使いたくない。しかし本質的には同じこと。

あの戦争を終わらせたただけだ。ほんとですか。これに対して最低限でも日本の安全保障、先程、申し上げた日本の安全保障は、もう、アメリカの安全保障ではほぼないんだらうという状況の中で、未だアメリカにすぎるのかと。要するに原爆投下は大戦末期の日本が降伏する直前の不必要な日本人に対する攻撃な訳です。イランに対する核施設に対する攻撃は、基本的に核施設の攻撃であって全く別のものですよ」

水島「うん」

用田「でも最低限、日本の首相であるならば、いや、お前達のやって来たことは非人道的だと。非人道的なのはイスラエルもガザの住民を沢山、殺しておきながら、更に、そこに原爆を投下すればいいって言った閣僚がおりましたね。こんなことは、はっきり申し上げて、白人が自分達は何をやってもいいんだというようなことを結びついていると。

白人蔑視とか、そういう話じゃなくて、それに繋がっている話があるので、基本的には、これと同じだって言われて日本は本当に黙っているのかと。大切なのは次ですね、これに対して中国の反応は一体、どう言っているかと言うと、林芳正は『一般的な歴史的な事象に関する評価は専門家により議論されるべきものだ』という風に言い捨てた訳ですよ。はっ？何ですか、この答は（失笑）」

水島「(笑)」

用田「中国人が見ているのは、所謂、ネット民が中国の奴は原爆発言に対して日本が何も反応しないと。環球時報は、この記者会見を聞いて、回答を交わしたことを、淡々と、しかし動画付きで紹介したと。だから日本の自尊心の無さと、それから、過度の対米追従で

すね。追従、この姿を見た。だから、何を言っているかと言うと、中国に対する影響について、日本人は戦う気力が無い」

水島「うん」

用田「これは、もう簡単に手玉に取れるという風に思っている訳です」

水島「うん」

用田「これが日本の今の政治、国民を見捨てた日本の政府」

水島「うん」

用田「私はこれを許せないという風に思っています。それと、もう一つは、ウクライナのロシアに対する攻撃で、もう一つはイスラエルのイランに対する攻撃を真珠湾攻撃になぞらえているのは、いくつもあるんですね。私も、これが歯痒いのは、日本の真珠湾攻撃は奇襲をしたけれども、宣戦布告の通知が遅れた。これが事実ですね。だから、それが故に、騙し討ちをした。そして内務省は罰を受けない、所謂、外務省的としては、この罰を受けていない訳ですね。彼ら二人ぐらひは外務次官にまで承認されているんですね。だから、これは基本的に意図的に行っていたらうと」

水島「うん」

用田「だから卑怯な攻撃だと。所謂、サプライズ・アタックじゃなくて、スネーキング・アタックです。スネーク、蛇のように」

水島「うん」

用田「擦り寄って来てやったというのが真珠湾の評価です。でも日本はそうじゃない訳です。ところが今回、二つの事案を見て、欧米はイランに対するイスラエルの攻撃が予防攻撃であって、核の破壊の為だから、これは問題ないんだと。宣戦布告をしていないし、イランはIAEの査察も受け、NPTにも入っている。そして6月13日に攻撃をする訳ですが、アメリカは6月15日に協議をしよう、イランとアメリカの協議をしよう。そして攻撃をした。トランプ大統領がこれを知らないはずがない。アメリカが知らないはずがない。これは騙し討ちです。これこそ見事な騙し討ち。

イスラエルに対してはお咎め無し。核を持っているかどうか判らん。IAEの査察も受けない。NPTにも入らない。これが二重基準。だから、我々は、よくよく考えなきゃいけないのは、あとで、もう一つ話しますけども、欧米は何が正しくて何をやってもいいのに、これの何処が法の支配だと。力による現状変更というのは日本が大好きですけどね、そんなことをしてはいかんというふうに、これこそ力の現状変更で、法の支配を破ったやり方です。

だから、これを見たらロシアのウクライナに対する攻撃を卑怯な攻撃だ、奇襲攻撃だということ、アメリカ、欧米は言う資格がない。日本に対して言う資格がない。ただ一つ、言えるのは、やはり外務省が宣戦布告の通知が遅れた訳ですね」

水島「うん」

用田「よもやざる事由じゃない訳ですよ。だから今から立ち返って、石破総理は毅然として、日本の当時の外務省の報道は間違いであり、彼らは不名誉なことをしたので、名誉を剥奪すると。どこまで出来るか判りませんがね。これを明確にしないと、基本は日本はいつまでも騙し討ちをしたという風になる訳ですけども、いずれにしても、アメリカ、欧米が同じことをやっても、これは知らぬ、存ぜぬという姿を、日本が放っておくということは、日本がこの事実と二つの原爆を放っておくこと。

これは日本が、きちんと反論しなければいけないことだろうなという風に思います。で、もう一つ、言わせて戴きますけども、今迄、脱亜入欧ということでやって来たのが、今も未だ流れている訳ですね。神仏毀釈でない廃仏毀釈っていうやつも、未だ根底には、流れている訳ですよ。それが日本を弱くした根源です、この二つが。

脱亜入欧というのは簡単に言いますと、G7は脱退した方がいいと思います。グローバリストの悪の根源は欧米であって、その根幹はG7であって、G7は既に経済的にも何の力も無い。文化的、道徳的に退廃している。正義も無いし、そして子供達が見ても判りませうけれども、G7はロシアの資産の利子を取って、そして、それをウクライナに回している訳です。これは誰が見ても泥棒ですよ。

だから仏教的見地から話すと、深い事を言わなくとも悪い事は悪い、悪い事をすれば地獄に、善い事をすれば天国に行くという考え方が日本に欠けている訳です」

水島「うん」

用田「だから、こういう基本的にG7の差別だと言われても言っちゃいますけど、白人の使いっ走りだとか貯金箱になっている日本。実に哀れな姿を出していると。それから、もう一つはNATO、これは、もう駄目です。NATOは、所謂、ウクライナ戦争の根本的原因はNATOの一方的拡大な訳です。

力による現状変更というのはNATOがやっている。そして同じことを中国がやっている訳です。核心的利益の拡大はNATOの一方的な拡大と一緒になので、だから一緒に事でNATOを信用するというのと、中国の核心的利益の拡大を支援している事とは一緒ですね。

何故、欧米が核抑止の根本的原因の除去ということに対して逃げるのかというのは、非常に簡単です。それは芋づる式に、先の大戦、バニ一大戦からイラク、リビア、朝鮮、ベトナム戦争、この欧米の手口が全部、明らかで、みんな、同じですね。それは戦争屋は相手を追い込んで、相手に引き金を引かせる。これをずっと同じことやっている訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから、これは芋づる式にこれが来ることをグローバリストだとかネオコンは恐れている。だから敢えて反対の事を申し上げますけども、ウクライナを勝たせてはいけません。ウクライナを絶対に勝たせてはいけません。それは全ての戦争の真実を闇に隠すから。

だから、我々はウクライナを勝たせなきゃいかんという馬鹿者が居るけども、とにかく、これを勝たせてはいけません。そしてウクライナは、もう皆さん、ご存じのように中国から北朝鮮へ軍事的な装備だとか技術とか、そういうものを提供している。

所謂、日本の敵ですよ。これがウクライナであって、かの有名なブラックロックも投資を中国にする。もう現実は見えていますよね。あとで、また、やりますけども、NATOと連携している限りロシア敵視というものは変わらないし、今は否が応でも、三正面作戦に追い込まれている。こんな馬鹿なことは無い。

こんな簡単なことも解らない日本に、トランプもうんざりしていると思う。プーチンとけんかして見えても、裏で私は手を組んでいると思う。だから、いつまでロシアを敵にするつもりがあるのかと、そういう気があるのかと、こういう風に思っているんだと思います。

それからNATOはアジアに軍事支援をしないし、出来ない。欧米、ヨーロッパの元首は全部、習近平詣ですよ。全員。これらは本当に戦うことはない。今、イギリスのプリンス・オブ・ウェールズ、昔、日本が沈めてやりましたけどね、だけど空母として生き返ってマラッカ海峡を入れて来て、南シナ海に入ろうとしたけど、Uターンして、別のロンドン海峡の方に逃げて行きました。何故か、中国が発動したからです。

こんなに5か月もかかって南シナ海も横断できないような軍事力で、何の支援が出来るか。日本は全く幻想をみている、こういう意味からすると、NATO、それからG7は日本の為にも脱退した方がよろしい。こういう風に思います。ちょっと長くなりましたが以上です」

水島「いやいや、大変、明解で、私から言うと、ほぼ私の主張している事と同じなので、大賛成でございますけどね。日本の普通の人から見たら、この討論に参加している人以外から見たら、全員がなんちゅうことを言っているんだって（笑）思うかも分かりませんが、でも本当にこの問題は思い切ってみんなで真正面から議論しなきゃいけない、そういう問題だと思います。

今、言ったウクライナの問題、イスラエルの問題、普通、考えて、こういう二重基準ですね。イスラエルは何も査察も受けなくて核兵器を持ってね、相手が核兵器を持ったら相手の国を攻撃して、政府の要人や軍人や科学者を、みんな、暗殺してオクケーってね。これは我々もやられますよ。敵国条項、持った国で我々が核武装したらアジアの平和の敵だ。もう、やっつけていいとね。石破君、まず、やられるのかも分からないけどね。実際、そういう形で暗殺も何も全部、オクケーみたいな、こういった無法なことが二重基準としてあるっていうね。我々は、そういうことが当たり前のことだと見なきゃいけない。

ガザだって5万7千人、少なくとも殺された人が5万以上。ケガ人を入れたら、もう膨大な数になる。これが別に1万人じゃなくて、千人のイスラエル人が、まあ、私は、やらせだと思っておりますけどね、ハマスがやったから殺されたから、5万7千人、殺していい。現実には今、本当にあそこを占領しようとしている訳ですよ。自分のものにしようとしている。大イスラエル構想とか色んなことが言われていますけど、さすがに多分、二日連続してネタニヤフと大統領が対談したので、上手くいかなかったんじゃないかという話があります。

でも、それだけ二日もかけて話し合うぐらい、色んなことを相談しているということですね。一つ、はっきりしてきたのはIAEAというのが、実は通報者が居て、これは、MIGが破壊しているっていう報道ですけど、あの空爆で暗殺された科学者が、みんな、IA

EAが、こういう名前で、ここに住んで、ここに居る。全部、通報していた。だから、特定 Bomb で全部、殺せたっていうね。IAEAって、そういうところですよ。

これは好き嫌いは別として、イランが頭に来ないところは無いと思いますよ。IAEAに査察を受けてね、一応、LPG体制にも入っていた。はい、どうぞ」

用田「今、おっしゃられたので、正にそうなんです、IAEAは基本的にはパランティアと連携してまして」

水島「ああ」

用田「パランティアとソフトと、所謂、軍事、ペンタゴンとか、そういう所に提供しているソフトを、そのまま使っている訳です。だから、IAEAがイランの中に入ると、全部、核の装備、核の施設がどうなっているかがピンポイントで全部、判る訳です」

水島「そうですね」

用田「それをイスラエルに流したっていうことで、イランは怒っているんですが、日本の新聞報道では全く出て来ない訳です」

水島「そうなんです。だから、これ…」

用田「それでね、もう一つあるのは、先程、申し上げましたようにイスラエルとアメリカが、ちょっとした記事、新聞の記事なんかじゃありませんけど、AIの協定を結んだというのがパランティアの関係する協定であって、実はこれが戦争を変えてしまうということで、今、我々は監視社会になろうとしていますよね」

水島「うん」

用田「というのは、我々のデータとか、そういうやつが日本の中でも取られようとしていますよね」

水島「はい」

用田「国をあげてやっていますよね」

水島「はい」

用田「もう、そんなやつが…」

水島「前のやつも、みんな、全部、含めてAIが…」

用田「はい。これが高度な監視社会と、それからディープフェイクですね。フェイク。これはメディアも含めて軍事機構の中に入って、偽の命令を与える訳です」

水島「うん」

用田「全然、撃たなくていい所に対して撃てと言ったり、撃つべきところに撃つなと言ったり、あっちに移動しろと言ったりということをやったんだそうです。だから、このディープフェイクと、それから高度監視とネットワークされた、所謂、暗殺システム。これが、CIAとMI6とモサドがつるんだ結果が、これなので、実はウクライナともパランティアは提携関係を結んでいるんだそうです」

水島「そうですね」

用田「私は、ウクライナの紛争を見ていて、いつも思うのは、いいタイミングでウクライナがいい場所に反撃するんですよ。だから、これ、本当に判るのかなあと思っていたら、基本的に最終的にはA Iが攻撃命令計画をつくって、それを実行させると。最後は人間が絡んでいるかもしれませんが」

水島「そうですね」

用田「この流れの中でやろうとしているので、先程、申し上げた無人機とかミサイルを、イラン国内で造ったというのは、即日本でも同じことがある」

水島「うん」

用田「日本は、それに反応せないかんで、先程、申し上げましたように、土地を外国に買わせるなど、中国は国防動員法があるぞということを、もう一回、喚起しなければ本当に石破政権に日本の安全を任すことは出来ないですね」

水島「そうですね」

用田「まあ、そういうことを、ちょっと付け加えさせて戴きます」

水島「さっきね、先々週の私の番組で言ったんだけど、やっぱり、今、言ってくれたモサドとM I 6とC I A、まあ、他にも色々ありますけど、つまり国境とか国家を超えた謀略情報機関っていうのかな、こういうのが独自で動いて独自で色んな事をやり始めている。

これはトランプ自体がハメネイのね、場所は判っているんだとか言っていたけども、つまりトランプ、お前が何処に居ても、どうやっても、いつでも殺せるよっていう、あれは、3週間前ぐらいの時、私は、それを言ったんですよ。でも本当に国際的な謀略機関がね、もうグローバル化して国民国家の中のそれぞれの情報機関じゃなくなっているっていうね。こういうことも、やっぱり本当に日本にも適用される。これは中国も知っているはずなんです。

もう、そういう時代が来ちゃっている。それもA Iを使ったことです。手を挙げました？ はい。もし、良かったら」

モーガン「あ、すみません。先程、用田先生がおっしゃったことについて、ちょっとだけ追加で」

水島「はい」

モーガン「用田先生がおっしゃっていること、110%大賛成で、二つの重要なポイントでパランティアということですけども、パランティアって米政府の中ではどれだけ重要なことになっているかと。日本の中では、そんなに報道されていないですけども、パランティアが、もう連邦政府を乗っ取った。もう終わりました。終わりました。そのパランティアは白人が作った制度で、用田先生がおっしゃったことは、とても重要で白人が平気で非白人の国を空爆する訳です」

水島「うん」

モーガン「日本に対してもやるんですよ」

水島「うん」

モーガン「トランプがそんな発言をして、長崎・広島とか。それでイランでよくやったって自分を褒めている訳」

水島「うん」

モーガン「もう長崎・広島、やって良かったと未だに思っているのは、共和党、民主党だけではなくて、アメリカ人の6割、7割以上ですかね」

水島「そうですね」

モーガン「もう常識ですね。もう非白人を空撃して、空爆して殺戮するのは当然なこと、ということは、パランティアという会社、まあ米政府もそうですけれども、ずっと前から日本人のデータを吸い込んでいる訳です。日本人のみんなは、何処に住んでいるかとか携帯データもあるし、スノーデンが指摘した通りNSAがこの国では前からみんなのデータを吸い込んでいて、パランティアがそれを使っている訳です。

もし米が日本に対しても同じような空爆がしたいと思ったら全く躊躇しないし、日本国内ではイランに対して、もっと空爆しようと言っている日本国内の白人とか、その白人が言っているのは今、日本を応援しているのは、日本が弱い国だから応援しています。ワシントンの属国だから日本を応援しています」

水島「うん」

モーガン「でも日本が独立すれば、同じ白人が直ぐ翻って日本を空爆しようと言うんですよ。それが日米同盟のリアルです」

水島「はい」

モーガン「日米同盟のリアルは、もし日本が独立すれば、その白人が直ぐ牙を向くんですよ。直ぐ微笑みを牙に切り替えて、直ぐ白人の本当の顔が見えると思います。今、用田先生がおっしゃったことは、とっても重要だと思います」

水島「その通りですね。宇山さん、どうぞ」

宇山「今、社長も用田さんもおっしゃっておられたIAEAでも、結局、イランの内部から、その情報が漏れていたという状況、そして、そのイランの核開発能力者、技術者をピンポイントで、あの様に殺すことが出来た背景に何があるかですが、やっぱり、私は、このイラン人の協力者がイラン国内の中に居てIAEAとも繋がっている」

水島「そうですね」

宇山「MI6とも繋がっている。CIAとも繋がっている。そういうイラン人が、多数、国内の中に居るんだろうと思うんですよ」

水島「うん」

宇山「そして6月13日の攻撃、イスラエルの空爆による攻撃のあと、実はイランは恐れ慄いて、慌てふためいてと言いますか、イラン国内の官僚達をバッサバッサと数百人レベルで処刑をしている訳ですね」

水島「はい」

宇山「その処刑をされている人達はどのような人達かと言うと、結局、スパイと疑われたような人達が、これだけ殺されている訳です」

水島「うん」

宇山「6月13日のイスラエルの空爆の作戦を展開するにあたって、実はイラン国内の中にドローンの基地とかミサイルの基地とかが秘密工場という形で設置をされていた、造られていたというようなことがあり、それを運営していたのは別に決してモサドの人間じゃなくて、イスラエル人でもなくて、イラン語を話すイラン人が枢要な所に入り込んで、全く愛国者のようなふりをして、これだけのことを、諜報機関と通じ合っただけで外国とやっていたということが、私は、これに驚いてる訳ですよ。翻って日本のことを見れば、この日本にも日本語を話す日本人が外国の諜報機関と通じ合っただけで、外国の為に動く、そういう保守のふりをするような機関の中にお勤めの人達が、かなり紛れ込んでいて…」

水島「ああ、ほんと、その通りですよ」

宇山「いざとなったら、このイランの攻撃の時のように、うわあっと火の手をあげて国内から崩壊させていくというセッティングになっているに違いないという風に、私は思うんですよ」

水島「そうですね」

宇山「そしてね、この話は、またあとで皆さんからお伺いしたいんですけど、ちょっと、私もモーガン先生に是非、お伺いをしたいのは、先程、掛谷先生がおっしゃっておられたことです。BRICSの首脳会議なんかに入国するかどうかという問題ですけどもね、私の考え方を言わせて戴きますと、モーガン先生と考え方が違って申し訳ないんですけども、これには決して入るべきではないという風に思うんですよ。むしろ、BRICSのメンバーであるところのインドとかロシアをチャイナから引き離して、こちら側に少しでも引き寄せるといふことの努力を日本がするべきであって、日本の様な今や経済がこんなに弱っている国がBRICSに入ってしまうと、BRICSっていうのは事実上の経済連盟ですね。

その経済連盟の中で中国が巨大な経済力によって、札束外交みたいなことをバチバチ引っ剥がしてやっている訳ですね。これで日本も札束で籠絡をされていく経済界の人間っていうのが、私には、もう目に浮かびます。絶対に、このBRICSには、日本はむしろ関わるべきではなくて、QUADのような日米豪印という、この多国間の連携の中に、ロシアも連携を加えて行くと。それから、私は、まあ、これをこの番組で言うと怒られるかもしれないけれども…」

水島「言って貰って大丈夫ですよ（笑）」

宇山「ええ、モーガン先生とも、ちょっと、ここが違うところですけども、私は何だかんだと言って、やっぱり日米同盟が基軸であるという考え方から、どうしても抜け出すことが出来ません。実質的にアメリカは日本を守りませんよ。私もそれはよく解ります。いざ有事の時に前達が勝手にやれというようなことで、決して私達は、それをあてにはしませんけれども、しかし一応、この日米同盟があることによって、中国に対する抑止になっているという事実もある。それを考えると、やはり日米同盟というのは軽視すべきではな

いし、やはり今、トランプ政権になっておりますから、やはり千載一遇のチャンスということで、トランプ政権と共に中国包囲網ということ的形成していく為にも、中国としっかりと距離を置いてデカップリングをしていくということが、どうしても日本にとって必要なことになっているのではないかなと思うんですね」

モーガン「なるほどです。意見が違いますね」

水島「うん、まあ、この辺は面白いところでね。折本さん、どうぞ」

折本「私も、日米同盟自体を否定しているのではなくて、簡単に一言で言うと、やっぱり真に独立した対等な関係であるべきだということだと思うんですね。しかし残念ながら、今の日米同盟っていうのは、同盟の名に値しない支配と従属の関係になってしまっているということが一番の問題でして、例えば、今、日米安全保障条約も、冒頭の前文は『両国の間に伝統的に存在する平和及び友好な関係を強化し、並びに、民主主義の諸原則、個人の自由、及び法の支配を擁護することを希望し、この両国の間の一層、緊密な経済的協力を促進する』ということなので、基本的に民主主義の同盟であるということが掲げられている訳です。

ただ、結局、じゃあ、民主主義とは何ぞやと言った時に、やっぱり我が国はそういう皇室を頂く国柄であるということで、アメリカの自由と民主主義とは相容れない部分がある訳ですよ。ですから、まずは基本的に日米同盟っていうのが、お互いの国の歴史だとか伝統文化だとか国体を尊重し合う対等な関係であるならば、私は日本にとって有益ですし、アジアのそういう平和にとっても必要な同盟だと思うんですけども、しかし一方的にアメリカのそういう価値を押し付けられているのではないのかということ、あとは日本が、この自由貿易体制ですね。そこに入る引き換えに、軍事的にはアメリカに基地を提供して従属をするっていう関係性だったと思うんですけども。

しかし今回のトランプ関税でも明らかになったように、軍事的に対米従属しても、経済的な利益を得ることは出来ないという局面に立ってきましたので、今の不平等な日米同盟というのは一旦、日米安保を終わりにして、しかも今の日米安全保障条約っていうのは、在日米軍基地と一体になっている訳ですね。

それは我が国の安全保障条約の特徴的なところは、この防衛条約と地位協定っていうのが一体不可分になっている。だから、この安全保障条約がある限り在日米軍っていうのは、居続けることになるので、一回、これをリセットして、エマニュエルみたいな一部のグローバリストによって価値を押し付けられる関係ではなくて、お互いの文化を確認し合っ、て、独立を担保した上で、もう一回、対等な同盟を結び直す。

その為には、アメリカが一方的に日本を守るだけではなくて、有事の際には日本もアメリカを守るという完全な平等、対等な相互防衛条約に変えて行く。そして在日米軍は日本から出て行って貰うという関係にしていく必要があると。そうすれば、別にチャイナの脅威を別に軽視している訳ではなくて、今の状態で、この不平等な条約関係を続けて行けば、結局、チャイナに対する抑止力にもならないというように、私は思います。それは日本が、いつまで経っても自立できないからです」

水島「この問題はね、あのう、もうじき休みに入る時間なので、室伏さんの意見を聞いたら休みに入りたいと思いますけど、簡単に言うと、宇山さんとモーガンさんの違いは、

例えば、私は、中国に対して凄く批判して来ました。南京の映画を作ったり、色々やったりしているけど、でも基本的にはアメリカと中国って同じだと思っている訳ですよ。

だから、あれは共産主義とか標榜しているとか色々あります。それからウイグルの問題も、我々は、ずっと関わって来だし、チベットにも関わって、私は、もう入国も出来ない（苦笑）直ぐ殺されるって言われて、前に暗殺リストに入りましたよ、水島さんって神戸に居る中国人の女性が教えてくれましたけど、そのぐらいですけれども、でも基本的なところで我々が発想を少し変えなきゃいけないのは、現状変更とか国の政権打倒や暗殺や、色んなものを含めて私が思っているのは、ソ連邦とか、そういうもの自体も、実際に支配してきたのはロスチャイルドを始めとする世界の少数の人達が、色んな体制をつかって世界支配を都合よくやってきたんじゃないかっていう認識があつてね、ただ、どっちの刑務所へ行くかって言われるとね、少しアメリカの方がいいかなとかっていうことが、よく言われる事があるかも分からないけども、その視点をどう考えるかはね、やっぱり本当に、ここは議論しなきゃいけない。

それから、嘘をつくのは嫌ですから言いますけど、私も折本さんと同じように5年、10年前は少なくとも自立しなきゃいけないと、だから日米安保は破棄した方がいいと。破棄して、本当にやるなら日米相互防衛条約だというような形で、国と国がきちっとやるようなら未だマシだけでも、でも、それは基地の問題が無いですからね。ということで、国と国がちゃんとやるならいいっていう風に言ったけど、今、変わっちゃっているんですけどね。

このウクライナや色んなもの、中東の何とかカラー革命を見てね、私の意見が変わって来ているのは、昨日、紹介したんですが『元USAID職員がアメリカ国内で「カラー革命マニュアル」を適用中と認める』、つまりUSAIDでDOGEっていう中で、色々クビになった職員達。大量の職員達が失業したので、今度は国内でカラー革命、つまり例えば『「非協力」ワークショップ：連邦職員に「内部からの抵抗方法」を教育』とか抵抗方法とか。実際、こういうことにノウハウを持って、アメリカ国内の分裂、つまり、トランプ政権の足を引っ張るということを職員が始めている。

つまり何処の国も分裂と対立を生んで、それで政権を倒していくとか、自分の都合のいい状態になっていく、これはリビアもエジプトもイラクも、みんな、そうだったっていうね、こういうようなことが報道されている。それから、もう一つ、これもUSAIDですけど、所謂、USAIDのところから、ずう〜っと武漢のウィルス研究所に何千のウィルス・サンプルが送られて来たことが証明されちゃった。

つまり完全に武漢と…これ、気をつけながら一応、言っているんだけど、武漢研究所とアメリカのファウチを始めとする、ああいうアメリカのあれとが繋がっていたということも証明されている。

ついでに、ちょっと言っておくと、もう一つは、この『トランプの「連邦粛清」が始まった』と。つまり『最高裁、歴史的8対1判決でグローバルIST官僚の大量解雇を承認』しちゃう。これを認めたっていうことですね。つまり、連邦政府から不忠誠で腐敗し、外国勢力に支配された職員達を一掃する完全な権限をトランプ大統領に与える。これを最高裁が認めちゃったっていうことです。

そういう意味では、さっき言っていたように、国内に入り込んでいる分子が本当にやるかどうか、やれるかどうか判りませんが、こういう判決を最高裁が出したっていうね。これも今日7月9日ですね。12時のニュースとして入っているっていうことがありますて、やっぱり日米安保の問題は本当に我々の国をどう見るか、この問題は、どうですか」

室伏「基本的に国際政治っていうのは万人に対する戦いの状況ですから、自国の事を守るのには自国だけでやるなんていうのは当たり前の話であるというのが一つあるのと。あと同盟という言葉も、どうも日本人は友人関係とか、よく言うじゃないですか。大切な友人とかね、我々の大切な友人と言いながら、実は単なるジャパン・ハンドラーズでね、そういう風なこと言うとか、あとはお隣さん関係とか言う訳ですよ。お醤油を貸し借りするようになって…」

水島「もう本当に…」

室伏「その中で、そういうことを、まあ、僕がそれ言っているのは、僕がよく知っている人なので何処とは言いませんが霞が関に、そういう人が居るんですよ。でも、どうやってもパーマストーン卿が言ったとされている言葉としてあるように、永遠の同盟なんて無いし、結局、あるのは自国の国益だけだっていう、そんなのは当たり前の話ですよ。

まず、それが理解できていないところから、おかしいんですけど、それを踏まえた上で、日米同盟というのを見ると、どうかって言うと、要は最初の行政協定の話から考えても明らかに日本をアメリカがどう使うかっていう、その為の道具であったりとか、あと日本に自主防衛能力を持たせないようにする為のものであったりとか、単純にそれだけですよ」

水島「うん」

室伏「しかも日米安保の中で5条が適用される云々という話をしますけど、そこに一言もね、日本の事、何か日本に対する攻撃で、アメリカが頑張ってるなんて一言も書いていない訳ですよ。しかも執政下ということで、主権の問題を棚上げにしようとしているということで、あれ、相当、仕組まれた条約だって、読めば解るんですね。

しかも、これに関して、大体、原文の英語の文章と日本語の文章って外務省って意図的に変な訳で当て嵌めているんですけど、これに関しては外務省の役人も結構、しっかりしているんですよ」

水島「うん」

室伏「注意しなきゃいけないのは、条約って整合と仮訳ってあるんですけど、原文の方を見ると、全然、違うことが書いてあったりとかするので、これ、本当に注意しなくちゃいけないんですけど、日米安保に関して外務省は比較的、ちゃんと書いているんです」

水島「なるほどね」

室伏「だから日本をコントロールする為の道具に過ぎないんだっていう風に考えなきゃいけない。ただ現実として日本の自衛隊って、これだけボロボロにされて骨太の方針の中でも待遇の改善をしようとしているんだけど、お金を上げますっていうことは書いてないですね」

水島「無いですね」

室伏「処遇の改善とかでも、じゃあ、兵舎をどうするんですか。どうしますか。東北の方にある施設は、未だに木造の昭和19年代の建物を使っているところありますね。それ、どうするんですか。仙台にあります。昔のトーチカを改造して使っています。それをどうするんですかっていうことに関して何も考えていない。

大体、財務省は国防に関する意識だとか専門知識とか全く無いですから。安いものを買って来ればいいよ。だから戦争になりました。武器が足りなくなっただけ言ったら、恐らく財務省は、いや、防衛省さんのシーリングがあるので、あとは現場で何とかして下さいって平気で言いますよ」

水島「(失笑)」

室伏「じゃあ、そういう頭の悪いのが財務省の主計官だということですよ。っていうか、財務省は事務次官から、みんなそうですけどね。そういう状態です。だから、日本が日米安保云々っていうことを考える以前に、本当に、ここと言えば、この地面じゃなくて、ここから地下1キロぐらい掘った所に居るので、まずは地上に上がって来なきゃいけないんですけど、地上に上がることをすらあれだし、例えば解り易い例で言えばエマニュエル・トッドがフジか何かの番組で核武装の話をしたら、元NHKの何かいるじゃないですか、眼鏡をかけた、あの変なアナウンサーのオジさん」

水島「はいはい、はい」

室伏「あの人が、たどたどしいフランス語でジャベジャベって言っていたんですよ。要するに英語で言うネバーって、言うなっていうことなんですけど、いやあ〜…」

水島「あの人、昔から言っているからねえ」

室伏「そう。だから、結局、それが日本のメディアもそうやって語らせないようにタブー視しているし、タブー視させる為の仕組みっていうのは、またUSAIDのお金もあるでしょうけど、CIAが出してメディアをコントロール、僕が言っているのは別に陰謀論でも何でもなくて、はっきり言いますけど、もし疑うんだったら、伊藤貫さんが『真剣な雑談』の中で紹介されていたアメリカの国際政治学者の論文を、僕は読んでいますから、普通にアマゾンで日本円にして5千円ぐらい。今、上がっているかもしれないですけど買えますから。その中に対象と金額が全部、書いてありますから、僕は、それに基づいて言っています。そういうことをやってきているので、今の日本の国防意識、安全保障意識ってそうなっちゃって、だから、それで本当に日米安全保障条約っていうのは、アメリカにとっては日本をコントロールするのに非常に便利な道具に、どんどんなっているっていうのが実態だと思います。

だから、まず、やらなきゃいけないのは、さっき言ったみたいに今、地下1キロに居る日本の防衛とか国防に関する安全保障に関する考え方っていうのを、まず地上までもって来ましょうと」

水島「事実性を持たせるっていうことだね」

室伏「ええ。だから、今、赤ん坊ぐらいで、何かね、パパ、助けてえ〜、バブウって言っている日本人を、大人の日本人にしましょうということですね。はい」

水島「この問題で一番、問題なのは、そのエリート層って言うか、指導層と言われる人達の頭が悪いって言うか、勉強していないってね」

室伏「はい、勉強していないですね（失笑）」

水島「知性の欠如って言うかね、やはり、この辺が本当に恐ろしいぐらいの感じがするんですけど、掛谷さんは、この日米安保の問題が今、出ているので、掛谷さんの意見を聞いてからCMに入りたいと思います」

掛谷「はい。さっき、宇山さんがおっしゃったことと絡むんですけども、それは私が言いかけた話で、中国がどうかって言うことなんですけど、やっぱり、私は、まあ、色々な中国人留学生とも沢山、知り合いましたし、他の国の留学生とも話すんですけど、日本人から見ると、やっぱり中国人が最も遠いなあっていう気がするんですね」

水島「(笑)」

掛谷「それで何かって言うと、やはり死生観を色々話した時に、彼らは、もう完全に現世主義で目に見えないものの価値とか、そういうものが全く無い訳ですよ。だから唯物論で、アメリカも確かにワシントンとかそういう人達だと思うんですけど、それでも、この前、ご紹介した通りジェイ・バタチャリアのように、要するに自分の地位や名誉を失っても人を救えたとしたら、それは良い人生であったと言えるっていうキリスト教的な生き方は、インド系の移民が、そういう生き方をするっていう人達も、まあ、西洋の中には、そういう人達が減って来たかも知れないけれども、やっぱり居る訳ですよ。

インドとかロシアにも、そういう目に見えないものを大切にするっていうところがあるので、そこで何か通じるものがあると思うんですけども、中国はそれが全く無いんですよ。なので、私は、日本は中国と組むっていうのは基本的に無理だと思っています。要するに価値観の根本が違うっていうところを、やっぱり認識しないと、中国はアメリカと組んだから、そうなっているのではなくて、中国はそういう完全に唯物論なので、ワシントンと相性がいいだけであって、ワシントンと切れても中国は中国だというのが私の見方です」

水島「はい。これは、前に私は自分の番組でも話しましたが、実はユダヤ人も、ある種のハウツーですよ。どう豊かに生きるか。どう安全に生きるか。つまり死っていうのが基本的に無い。それで、もっと言うと、中国は老子とか荘子ぐらいを除けば、全部、孔子様や孟子様も他の色々な朱子八卦や、こういう人達は全部、ハウツーです。どう生きるかというだけであって、死というものが今、掛谷さんの言った通りですよ。現世を生きている時にどうやって豊かに楽しく暮らせるか、こういう価値観の人達だから、掛谷さんがおっしゃるように、そういう意味で言うと、死とか、そういうものを持ち込んだキリスト教、例えばイエスの贖いの死とかね、こういうものを持ち込んだのと違うところがある。

今言ったように、それでユダヤ教も正直言うと、我々は特集をずっとやっているんですけどもね、やっぱり、どう生きるか。死というのは、もう駄目な世界で、あまり関係ないというね、死なない為にどう生きるか、どう守るか。だから、イスラエルのネタニヤフさんのやり方、自分達の命を守る為だったら異教徒なんか、どんなに沢山、殺したって構わないというね。ああ、これは宗教的な感情のベースがあるんじゃないかということまで含めると、今、言ったように相容れないとかね、中国と中々相容れない。

ただ現世利益をやる時、日本人が間違っただのは、いや、話をすれば、みんな、腹割って話し合えば仲良くできるよ、技術もあげるよ、金もあげるよって、やった拳句が今、こういう状態になっているっていうね、そういうことが我々の中に無かったっていうか、中国進出した企業や経営者達が同じ類이었다。

我々の国は、ある意味で中国を批判するっていうのがあるけども、本当に今だけ、金だけ、自分だけの経営者ばかりになっちゃったんじゃないかという、特に平成に入ってからね。だから生き方の問題も、やっぱりねえ、うんと悪く言うと、孔子の論語だって、どう生きるか。どうやれるかというね、結局、生きるっていうこと的前提で、そういう思想っていうか、この問題と、さっき儒教の話を書いてくれましたけど、やっぱり儒教は、その哲学で死とか、そういうものは仏教が補う。

それから自然観、世界観は神道が。だから、日本は、物凄いバランスの取れた深い儒教、朱子学の、いかに行くべきか。死はどう受け止めるか、っていうのは仏教で、世界はどうなって、自分の存在は何かって言うと神道というね、実は、これが皇室の中に江戸時代まであったというね。

だから、やはり、そこのところを見なきゃいけないなあと思いますけど、是非、モーガンさんと色々な方の日米同盟、日米安保条約の問題、やっぱりアメリカをどう見るかっていうことも含めて、大変、重要な問題なので、独りぼっちな日本、安保条約が無くなると、本当に独りぼっちなのか、既に本当は独りぼっちだって、もう捨てられているのに未だ想っているのかとか色々意見があると思います。一回、コマーシャルを入れてから、また皆さんのご意見を伺いたいと思います」

一同「(礼)」

<後半>

水島「はい、後半になりました。今日は独りぼっちな日本っていうことですが、唯一、すがっているのが、すがっているっていうか、日米安保条約というような形で言われています。そういう形が、これから続いていくのか、恐らく、いかない、先程、折本さんが言ってくれたように、トランプ自体もそういう経済で色々な事を言うことを聞いているからということで、防衛でというね、こういう関係じゃなくなってきた。韓国自体も、もう韓国に海兵隊は居ませんから、現実に韓国に核武装論が出ているっていうのも当然で、7割ぐらいの韓国人が支持している。

同じような形で言うと、自分の事は自分でやれというね、そういうことがトランプ政権の基本になると思うんですけども、ただ、物は買え。冒頭で安倍さんのことが出ましたけど、二日前に暗殺されたご命日ですけども、前に彼らの間でTPPの問題が大騒ぎになったじゃないですか。私、安倍さんのところに行ってTPP反対だという話をして、とにかく竹中平蔵を辞めさせた方がいいよって直接、話したら、まあ、これは前に何度も言っている事ですけど、いや、水島さん、竹中は学者じゃないんです、政治なんですよっていうね、つまり政治の代表として、政治っていうのは、向こうのそういうエージェントとして居るから、簡単にクビに出来ないんだということを安倍さん自身が言っていましたね。

もう一つ言うと、今、言ったようにTPPをやって我々は反対しているけど結局、TPP賛成でアメリカとやったでしょ。トランプ政権になったら、トランプ政権がTPPを脱退する。何をやったかと言ったら、物品協定を相当、タフな交渉をしたんですよ。それで何が出来たかって言ったら、トランプは安倍と交渉して物品協定を結んだら、トランプ自身が圧倒的に大勝利したと。

あの当時、新聞か何かで誰かも言っていたんだけど、日本が獲得したのは、チャリンコを輸出する時に税金が無くなるっていう、それだけだと。あとは、アメリカの要求を全部、呑んだ。つまり先程、何方かが言っていたけど、安倍さんだから良くて、石破だからっていうのは中々そうじゃないっていうのもね、現実にはトランプはそういうところ、物品協定はTPP以上に厳しい、向こうに都合のいい条件を呑ませたっていうね。

それと、もう一つ我々が考えなきゃいけないのは、関税が駄目だっていうことだけど、明治の新政府は関税の障壁って言うか、関税権を得る為に必死になって色々頑張ったっていうところがあるね、だから必ずしも自由貿易がいいって言うふうに、その前提もね、我々は刷り込まれているけども、その問題もちゃんと考えなきゃいけない。

それぞれの国が自主的に関税権を持つとかいうことは極当たり前のことでもあると思うんですけど、ただ自由貿易にすると絶対に強い奴が勝つんですね。大店法と同じで、我々も小さい商店街がみんなスーパーマーケットで全部、やられちゃったみたいに、そもそも自由だからいいっていう、自由競争だからいいっていうもんじゃないというね、この辺のことも踏まえるんですけど、でも、まあ、今日は孤立する日本の現実ですけど、モーガンさん、色々な案が出ましたし、それぞれ、考えがあると思うんですけど」

モーガン「はい」

水島「聞いていて、どうですか、日米安保の問題ですけどね」

モーガン「基本的に、まず、中国の問題ですけれども、掛谷先生がおっしゃったこと、私は、その通りだと思っています。中国論は今、おっしゃった通りです。本当に中国と日本との間に溝と言いますか、中国と日本を比較すれば国民性がこんなに違う国は多分、他には無いと思います。じゃあ、どうすればいいかって、私は基本的に日本人が決めれば良いと思います。どうしても米が関わると、中国が矮小化されるか拡大化されるか、はっきり中国という国が見えていない訳です。

それはワシントンの条件がどうしても優先されてしまうので、日本という中国の隣国からすれば、本当の中国は何かと、ワシントンを入れないで見た方がいいと思っています。日米同盟って、折本先生がおっしゃったように、私は、あの米は同盟関係を持ったことが無いと思います。国を利用するか非白人を死なせるか、そのぐらいのレベルで日米同盟は同盟関係じゃないですし」

水島「うん」

モーガン「中国の抑止は最近、気になっている言葉で、中国の抑止は基本に賛成ですけれども、それは日本の為かワシントンの為か、その区別が大事だなあとっていて、例えば台湾海峡の通過とか、その火遊びをするのであれば、中国と本格的に戦争をする準備が必要だと思います」

水島「はい、そうなりますね」

モーガン「でもね、米に覇権されて、その火遊びをやって、もし損になった場合、それは米からすれば知らないよと言って、日本だけが損をする、そういったことはやめて欲しいなと思って、日本の国益をハッキリした上で、中国と関わっていいし、または放っておけばいいし、無視していいし、それが日本人の決めるべきだと思っていて、抑止はそういった問題もありますし、あと誰がワシントンを抑止するかと最近、気になっています。

イランの空爆もありましたし、イスラエル問題もあるし、ワシントンがかなり奔放していて、全世界では問題を起こしていて、先程、用田先生がおっしゃったウクライナを勝たしてはいけないと、私は全く同感で、何故かと言うと、ワシントン帝国の崩壊を、私は図りたいと思いますから、それが私の一番、大きな課題です。何故かと言うと、そうすれば日本とアメリカが自由になるからです。

もう一つの問題があります。最近、考えている事ですけど、トランプがまた大統領になって、イランに対して空爆をやって、そのあと自慢話として広島、長崎を持ち出して…」

水島「ありましたね」

モーガン「それが多分、アメリカの6割7割ぐらいの常識だと思っていて、それが良かったとか、8年前、トランプが初めて大統領になって、中国に対する厳しい姿勢を示して、とてもいいなと思っていました」

水島「うん」

モーガン「その4年間をずっと、中国に対して、もっとやって欲しいと。中国をもっとやっつけて欲しい。でも、この8年間、アメリカ国内が、かなり変わって来て、アメリカの右翼もそうですけど、保守系もそうですけど、あからさまな白人至上主義が、また見えて来ていて、今、振り返って考えてみれば、あの反中、反共的な発言は、その中の何割ぐらいが本当に中国共産党がけしからんって、その何割がアジア人が嫌だとか、要はその中に人種差別主義が潜在的に潜められているじゃないかと思えます、そういった考えがあると考えていて、そうすると私の考えはこうですけども、BRICSっていうのは、ただの手段です。日本が米から独立して自由になれば、そのあとBRICSに残ってもいいし、残らなくてもいいし、ただ米から離れて、中国を含めて周りの国を直接、見て、日本の国益をはっきりして、これから、どういう関わりをするかと日本人が決めるべき」

水島「うん」

モーガン「でも米が入ると、あのような米の思う壺に入る抑止作戦もあるし、あと、やっぱり白人至上主義とか白人が500年間やって来た、非白人を死なせるとか、戦争が勃発すれば、私達はワシントンという砦の中に居るんです。お前達は死んでくれと、何回もやったことがあるじゃないですか。それが最近、本当に大変、気になっている事です。

最後です、包囲網です。私も中国の包囲網は基本的に賛成ですけど、トランプは本気じゃないと思えます。トランプは逆に、中国に東アジアを譲る準備をしていると思っています。もう日本と韓国を見捨てて、中国よ、お前達はこの問題を受け継いでくれという感じで、俺達は、要はユーラシアは中国のもの、ヨーロッパも東アジアも、もうその全ては知らないぞと。北米と南米ぐらいとグリーンランドが新しいモンロー主義なのではないかと考えていて、そう考えると、中国の包囲網は基本的にいいと思えますよ。でもトランプが、その相手がどうなのか非常に気になるポイントです」

水島「そうですね。今、言ったように、今迄、出ていることと言えば、中国包囲網ってというのは、トランプ政権がロシアとくっつかないと成り立たない。これも、さっき出ましたけど、ここは、ちゃんと踏まえて貰いたいと思うんだけど、八百長って言うか、やらせの言葉とか、裏腹なことを言う、つい最近のトランプの発言は、中国は誠に公正な貿易をやるか、習近平は大変、優秀で素晴らしいって（笑）、言う訳ですよ。

それで返す刀で、プーチンはとんでもない奴だと。嘘ばかり言って、とか言って、ついこの間まで言っていることと変わっているけど、じゃあ果たして本気で、それをずっと貫くのかって言ったら、それも判らないですよ。

八百長政治というか、色々ぶちまけて見て反応を見ながらやっていくってことがあるので、おっしゃるように、そういう政治だっていう、それと、もう一つ、やっぱり、皆さんは、これもモーガンさんが今、言ったように、今回、イスラエルとかイランにやったことは、ブッシュがイラクで大量破壊兵器があるから許さないということで湾岸戦争を始めたじゃないですか。それと同じ論理ですよ。

大量破壊兵器があって危ないから、中東の平和が破られるからフセインを排除するというと同じことをやって、もしかしたら失敗した可能性もあると、ハメネイとかを含めてイスラエルと共同でやってみたということもあると思うんですけど、だからトランプ自体が今言ったグローバリスト、もっと言えばネオコンと同じことを始めている。

今回のウクライナで本当に、これも、やはり言うように（笑）、八百長かも分からないけどウクライナにパトリオットを配備することを承諾したとか言い始めている。実際、行われるかどうかは分からないけど、やるかも分からないというような事があると言えるでしょう。

今迄、ロシアと一緒に何かやろうとしていた方針を替えて、グローバリストのバイデンと同じことを言い出している訳ですよ。論理もバイデンが言っていたことと、今の状態では同じことになっている。だから、これが八百長なのかどうかってことはあるんですけど、この辺をどう思うか聞きたいんだけど、宇山さん、どうぞ」

宇山「今の話ですけども、7月7日にトランプ大統領がウクライナに対して武器の支援をするよというようなことで、所謂、バイデン路線の振り出しに戻ったというようなことが、よく言われているんですが、結構、これには信憑性があるんじゃないのかという風にも、実は思っているんですね。

トランプ大統領は今、誰から、このウクライナ戦争に関して最もよく話を聞いているかと言うと、福音派のバーンズ（Mark Burns）牧師という人物が居るんですよ。この福音派の牧師は、トランプ大統領に進言をするにあたって、ウクライナに訪れてウクライナの惨状というのが、どういう状況であるかということ、トランプ大統領に、実際、自分が見聞きしたことを逐一報告して、それにトランプ大統領が心を動かされたというようなことが、結構、言われている訳です。

前回の討論会の中でも申し上げましたと思いますが、この福音派というのは結局、ユダヤに乗っ取られた組織だと、私は思っているんです」

水島「とにかくイスラエルを守るっていうのが前提だよ」

宇山「そうです。もう完全にイスラエルと一心同体のそういう乗っ取られて墮落した組織に、トランプ大統領が支えられているという事実の中で、そのバーズ牧師なんかウクライナは可哀想ですねえと。やっぱり、これを守らなきゃいけないというように、トランプ大統領に吹き込んだというような経緯が、この4月にあった訳です。

フランシスコ教皇の葬儀の時には、ちゃんとバチカンのフロアでゼレンスキーとトランプ大統領が差しで話をして、うんうん、そうだ、そうだというようなことを言っていると。私は、トランプ大統領っていうのは、常に物事が揺れるんだと思うんですよ。最初は右に走っていたかと思ったら、直ぐに左へ急展開していくと。どちらにも軸足を置いて、どちらの外交ツールも使えるようなフリーハンドを握っておきたいという、彼一流のディールのやり方だろうと思うんですよ。

今のトランプ大統領のウクライナに寄って行っているっていうのは、これで彼の中では、私は本物だろうと思うんですよ。中東だってそうです。つい、この間まで、5月までは、中東諸国を周遊してイスラエルを外していた訳ですよ。サウジとUAEとカタール、こういうアラブの国だけを周ってイスラエルを外すと、イスラエルと距離を置くというような外交をしたかに見えましたが、しかし、今回、この6月には、もうイスラエルと共に軍事作戦をするというような、相反する立場の事を同時に行う訳ですね。

先程、社長がおっしゃっておられたように、一方では習近平を讃えると。一方では、いかにして中国を叩くかということをするという、常に二つのものを同時に走らせて、さあ、それが、どういう形になっていくのか。トランプ大統領は、よく、こういうものの言い方をします。事態をよく見てみよう、よく勘案してみようという言い方をしていますが、こういうボールを様々な方向から投げて戦略を立てて行くというやり方が、彼の独特のやり方だろうと思います。

私は、先程の折本さんの話よりも、更に強硬なお話をさせて戴きたいんですが、実は日米安保というもの、こんな従属のツールっていうのは本来、破棄すべきだと、私も思っているんですよ。その破棄をする時っていうのは、核武装してからですよ。核武装さえすれば、こんな日米安保なんて、はっきり言って要らない訳です。しかし悔しいけれども、核武装する迄は完全に従属させられているツールだけれども、やっぱり、この使えるものは使っておくという発想で、日米安保を基軸にしなければならんという部分もあろうかと思いますが、やっぱり日本が本当の意味で主権を持つということは、一体どういうツールによって持ち得るかと言われれば、これは核武装するしか方法が無いと思うんですね。

自分で自力で立って自衛をするということは、今の日本の経済状況を考えても、それ以外に方法が無いと。それさえできれば、この腐った日米安保なんて、さっさとビリッと破って捨ててしまえばいいんだろうと思います。

更には、モーガン先生も強硬な事を申し上げますが、私はトランプ大統領っていうのは、モーガン先生以上に信頼できないというように思うんですね。やっぱり他国の頭領を信用するということは、決してするべきではないと思いますよ。本当にいい加減なこと、デタラメを、先程、モーガン先生、良いことをおっしゃいました。

彼は、この関税同盟で中国を包囲する気持ちなんて無いだろうとおっしゃいました。実は、私も最近、そんな風に考えている訳です。確かに関税を、日本が本当に同盟者であるかどうかということを見極める試金石にしているというようなことが当初、言われたけ

ども、どう考えても不自然ですよ。こんなムチャクチャな関税を、日本に突きつけながら、さあ、同盟関係で、どうだ、一緒に中国とやろう、中国に対しては関税とは関係なく、これは米日が協同して当たって行かなければならないものですよ。

関税がどうかっていう条件を付けること自体、私はおかしいと思うんですよね。そういう点で、やはり私はトランプ大統領を信用していません。そこはモーガン先生よりも多分、私の方が懐疑的なものの見方をしているのではないかなという風に思うんですね」

水島「なるほどね。折本さんは、どうですか」

折本「そうですねえ、イランの攻撃にしても、これも一つの何かやらせと言うか茶番と言うか、そうなんじゃないかと疑ってしまっていて、結局、核施設を攻撃しても、実際には何かバンカーバスターで破壊し切れなくて、実は無力化出来ていないんだけど、でも、これを使ったんだと。だから思った以上に、イランが今、報復していないじゃないですか」

水島「うん、報復も知らせていたからね」

折本「はいはい」

水島「撃つ時に撃つからねって行って…」

折本「そうですね。だから、やったふりをしている風に見せかけている可能性があるなと。そもそもやっていることは確かにイラク戦争の時と同じですけども、ただ、しきりにヴァンスとかも、これはレジーム・チェンジを目指しているのでは無いと」

水島「うん」

折本「あくまでも核の無力化が目的であって、レジーム・チェンジはしないんだという風に言って、何か条件を付けている訳ですよ。なので、そういう意味では、イスラエルに対して、ここまでやったよって言う風に見せる為に、そういうことをしているんじゃないかなという風に疑ってしまったので、実際はどうなのかっていうのは、また、お聞きしたいんですけども。

あとは、中国、チャイナに対しても本当にモーガン先生がおっしゃるように、最終的には何か結局、ディールで和解をして、日本が外されることになるんじゃないかなと。まあ、散々防衛費を増やせとか言ってアメリカの軍事産業が儲かるようにしておきながら、けしかけて、こっちには危険な火遊びをさせておきながら、最終的には梯子を外して、和解をするんじゃないかっていう風に疑ってしまっていて…」

水島「何処と、ですか」

折本「チャイナとトランプが、ですね」

水島「ああ、はいはい」

折本「チャイナと和解をするんじゃないかと。特に、実は習近平が失脚しかかっているんじゃないかみたいなニュースもあるじゃないですか」

水島「そういうことが相当、出ていますね」

折本「はい」

水島「それと、やっぱり体力的な問題が言われていますね」

折本「そうですね」

水島「引退するんじゃないかっていうね」

折本「そうですね。病状が悪いのか、それとも何か権力闘争で今、負けつつあるのかってところで、例えば胡錦濤派の人達、そのグループが巻き返した時に、当然、外交政策というのも変わって来ると思うんですね。覇権主義的な、あぁいう毛沢東主義的な路線から転換して、もしかすると、そういう鄧小平の路線に回帰する可能性もあるので、そうした時、90年代に、よくジャパン・パッシングとかって言われたじゃないですか。クリントンの時に。チャイナは結局、同じような状況で、勝手にチャイナが外交政策、対米政策を変えて、そこで何か和解して日本が外されて孤立をしていくっていう流れになるんじゃないかということに危惧しています」

水島「でも、それは非常に、まあ、最近、チャンネル桜の番組でも報道しているけど、やはり習近平の立場」

折本「はい」

水島「軍事委員会の側近が2人、更迭されたか消えたか言われていますから、変わるとなると、最近のトランプの中国に対する評価と言うかね、あぁいう調子のいいことを言っているのも解って来るといって、それと、もう一つ中国は、現実にはマーケットとか生産能力とか、それからレアースの問題とか、どうしても外せないんですよ」

折本「そうですね」

水島「日本を捨てることは、いくらでも出来るんですよ。金だけふんだくって」

折本「ええええ」

水島「そういうことは出来るんでね、客観的に見るとどっちを選ぶかって言ったら結局、ニクソンの時もそうだけど、頭越しにバア〜んと中国とくつついちゃう。もっと言うと、習近平体制じゃなければ、大義名分も出来て市場何とか経済っていうね…」

折本「ええ」

水島「胡錦濤派が今、また、のして来ているという話になっていると。それともう一つ、アメリカの経済界自体が、実はバイデン政権を見て解るように、物凄くアメリカの企業が中国の中にべったり入り込んでいるとなると、マーケットと色んなものを考えると貧乏っらしい日本よりも、まず、どっちを優先するかって言ったらチャイナを優先する。

それと、もう一つは政治体制とか、そういうもの自体も習近平、毛沢東主義的な体制からちょっと緩くなりましたよということになると、やっぱり、それをいくらでも応用しちゃうっていうね、だから全然、言わないじゃないですか、ウイグルの問題やチベットの問題とか、これ、もう、はっきり言うと、それは他人の国の問題みたいな形でトランプは片付けちゃっていますから、頭越し外交というのは、やっぱり凄くあるんじゃないかっていうね。

もっと言うと、大分前から室伏さんとかも言っていたのは、草刈り場。中国と緩衝地帯にする、つまり日本は草刈り場で、いいように俺達でやろうぜと。中国とアメリカでシェアしながら丁度、緩衝地帯で、ここだけは、いくら、ふんだくたって大丈夫だからと。そういう国にさせられる可能性が非常に高い訳です」

折本「そうですね、山分けするみたいな（苦笑）」

水島「はい、そう。山分けで」

折本「はい、分割統治じゃないですけど」

水島「やりたい放題をやるっていうね」

折本「はい」

水島「やっぱり I R の問題」

折本「うん」

水島「つまりユダヤ・マフィアと言われているね、あのMGM、それから中国とベッタリしているオリックス、これがやる訳ですよ。運営は香港シンジケートの、あのチャイナ・マフィアのサンシティグループが入るんじゃないかって、本当に大阪が典型。これからの未来の草刈り場としての日本像。こういうようなことがあるので今、おっしゃることは結構、リアルな話じゃないかなという気がするんですよ。室伏さん、さっきもコメントされましたけど、この問題についてはどうですか」

室伏「まあ、今ね、その話で言うと、ちょっと色々一応、コメントをしておきたいんですが、まずアメリカによるイランの攻撃って、何故、先に言っておいて形だけやるっていうことにして、それを受けてイラン側も通告した上で誰も死なないように、取り敢えずミサイルを撃ちました、お終いっていうプロレスをやったかって言うと、イスラエルのネタニヤフ政権は、要するにトランプを罫に嵌めて、とにかく対イラン戦争に引き摺り込みたい訳ですよ。トランプはそれが絶対に嫌だし、それでトランプ、アメリカが対イラン戦争に引き摺り込まれると、今度、完全に東アジアがぽっかり空く訳ですよ。

そうしたら、中国のやりたい放題になるでしょう。だから、それを絶対にしたくないから、だから、とにかく余計な戦争はしない。アメリカの国益と関係ない戦争でアメリカの若者の血を流させるようなことはしないって、これはトランプが一貫して、ずう〜っと、言っている訳ですよ。だから、その為に、一応、プロレスをやって、しかも、あそこは穴ぼこが開いたから、もうネタニヤフとしてもギャーギャー言えない訳ですよ。

それで取り敢えず抑えたと。勿論、ネタニヤフは、あの手、この手、これから一回、またトランプを引きずり込んでやろうかっていうことを考えている訳ですけど、今のところは、これで止まっているっていうのが、まず実態です。そういう風に動いている。

だからトランプとしては、余計な戦争はしたくないっていうのはありますね。対中国に関して、日本人は何かTPPが対中国を包囲網とかありますけど、あれは包囲網じゃなくて、まあ、元々南米の小さい国が何かやりますって言っていた話と、東南アジアの件ね、のったのを単純に使って日本を食い物にしようぜっていう、オバマ政権が考えたからじゃないですか。

だから、あれが平和の海でも何でもなし、要するにアメリカからすれば、東アジアに、もう凄く良質のお肉の丸々太った豚である日本を、ずうっと70年間、育てて来た訳ですよ。そろそろ食おうかという話を考えただけだし、何故、トランプがTPPをBad Dealと言って脱退したのは、二つあって、一つはメガF×ディールは駄目だっていうのがあって、二国間でやるというのがトランプの基本的な考え方ですから、それがあんですけど、何故、メガF×っていうものが駄目かって言うと、ポイントなのは、さっき、折本さんが言っていた、アメリカがつくったグローバル・サプライチェーンって結局、いかにコストが安い所、コストというのは人件費とか、そういうのがあるし、あと、もう一つはコンプライアンス・コストですね。

法令遵守コストが安い所。色んな規制が無ければ、やりたい放題。それこそバングラディッシュで、まあ、何処とは言いませんけど、某衣料メーカーの下請けの、何か、そういう所の工場が、要するに、まずは労働規制が無い。そして水濁がないから、そこで使った染料とかも何か、もう流したい放題。川がピンク色みたいになっても、全く構いませんっていうね、そういう風な所で作って、いかに安くするかっていうことですが、何故、安いものが必要かって言うと、勿論、儲けを多くするっていうこともある訳ですけど、安いものしか買えない人が増えちゃったからと。

何故ですかって言ったら人件費を抑えるから、さっきの移民の話と繋がりますけど、僕はずうっと昔から言っていますけど、移民を入れることによって底辺の競争が始まるよと。移民と同等かそれ以上、って言うけど、むしろ、移民の側に日本人の給料を下げるよと。そうしたら、また日本は物が買えなくなって需要は収縮してデフレになりますから、それに合わせてコスト削減する為に、また人件費を下げるっていう、それが正にデフレ・スパイラルという悪循環になりますよっていうことですけど。

だから、そういうことをせざるを得なくなって、それによってアメリカの格差が生まれましたね。そして元々やっていた自動車とか鉄鋼、そのラスト・ベルトが生まれちゃいましたね。これを、もう一回、取り戻そうっていうのがトランプっていうか、はっきり言えばJDヴァンスの発想ですよ。だから、そういう発想で、まず関税っていうものを見なきゃいけないのの一つあるのと。

あと、これまでアメリカが、そうは言っても、国民がローンまで借りて物を買っていた訳ですよ。もう、いい加減にしてくれと。何故、お前ら、アメリカの需要にこたえるんだよというのを遮断する、だから、てめえの国のものはてめえの国で買いな。だからトランプは、あの大統領令の中に付加価値税、日本で言えば消費税っていうものが、非関税障壁の第1号みたいにしてドォ〜ンっとやられている訳ですよ。

その下に、内需がいかに低くて貿易依存度が高い国で、ドイツの話とかシンガポールの話が書いてある訳ですよ。だから、これまで、そういう一部の人間だけが儲ける様に、しかも、それがアメリカの犠牲であった、そういうことがアメリカ国民の犠牲で成り立って来た。そういう風な貿易秩序というか経済秩序を一回、ぶっ壊して再編しましょう。これがアメリカの目的ですよ」

水島「なるほどね」

室伏「だから、そういうコンテキストで、中国との交渉も考えなきゃいけないし、何故、日本に対して25にするとかね、ブラジルだって50%にしましたよね。今の前の大統領

に対する処分があれだからって言うんですけど、要は、それも何故、そんなことを言うんだって、日本のメディアは言いますけど、要するに自分にとって都合が良かった訳ですよ。だから自分にとって都合いいようにしたいから、そこで関税っていうものを使って色々やろうと。だから、これは水島さんがおっしゃっていた通り、単純にお米を買いますとか自動車を買いますとか、そういう話じゃないんだと。そういう日米構造協議の時みたいな矮小化された話じゃないんだと」

水島「うん」

室伏「でも、それを言うと、日本人ってビビるし、しかも、今の内閣総理大臣は、よくおっしゃるように蚤の心臓の人じゃないですか」

水島「ねえ。もう蚤以下の心臓ですからねえ」

室伏「そうですね。だから、こうやって米の話をする、日本は今、米で動揺しているから、令和の米騒動ですから、それを言ったら、こいつらは引くだらうって完全に足元を見られている訳です」

水島「うん、そうですね」

室伏「そう。今、そういう状況だっていうことを頭に入れないと、この問題は解らないですけど」

水島「そうですね」

室伏「こういう話ってオールドメディアの中で一言も出て来ないじゃないですか。しかもネットメディアでもインチキ人がいっぱい居て…」

水島「もうね、これは大事な話ですよ」

室伏「何となく何かセンセーショナルなことを言っておけばいいや、みたいになっているという…」

水島「そういうことだよね」

室伏「うん、まあ…」

水島「二つね、せっかく言ってくれたので、私は、もう大分前から、バンカーバスターをやった直後に言ったのはそれなんです。これは、これからのことを見れば解るんだと思うんだけど、イスラエルに、あれ以上、イランを爆撃させない為に強い行動を自分で執ってやらせたと。イランにも、それを言い聞かせておいたって。向こうも反撃もそういうやらせのもの。これをやるのと、ミアシャイマーが半月ぐらい前に『イランは核武装すべきだ』と。あのミアシャイマー、つまりバランス・オブ・パワーと地政学をやったミアシャイマーって、私は割と高く評価している人だけど、この人が半月前に言っているというのは、バランス・オブ・パワーの状態をイランにつくり出そう、つまりイランが核兵器を持っているか持っていないか、壊れたか、全部、破壊されたか破壊されていないかを言わない状態。

イスラエルに一方的にああだこうださせないという形の、そういうバランス・オブ・パワーを考えたんじゃないかと。それでイランは、いや、やっていませんよと、これからも言

うだろうし、I A E Aは拒否すると言っている。まあ、交渉によっては認めるとは言っているけれども、こういう状態で中東の場合、本当に協定とか何かじゃなくて、バランス・オブ・パワーの中に持って行こうとしているんじゃないかという、それが彼の言う平和ということじゃないかなっていうね。これは、やっぱり、そういうのがあるのと、丁度、言ってくれて思ったのは、トランプって消費税のことを非関税障壁と言っていたんですよ」

室伏「はっきり言っています」

水島「今、参議員で消費税のことを言うのに、言わないでしょ。米だ、どうたらこうたらと言っているじゃないですか。だから本当に一瞬なんだよね」

室伏「だから石破政権とか、あと、森山幹事長が言っている話、消費税はこうこう、こうだとか守るっていうのは、完全に財務省が用意したテンプレを読んでいるだけです」

水島「まあ、だからねえ…」

室伏「あれは完全にメチャクチャ、だって、もう制度的な観点からしたら、完全に間違っているんです」

水島「そう、いや、はっきり言うとなえ…」

室伏「完全な間違いです。だけど、それを言うっていうことは、まあ、それぐらい、もう石破は完全に洗脳されているし…」

水島「うん、そこが根っこだよ」

室伏「あの人、馬鹿だから、事の本質が解っていないんですね」

水島「これは希望的な観測だけどね、財務長官が来て、お前、消費税はあれじゃないかと、お前の輸出企業は還付金を貰うとか色々しているじゃないか、やめさせると言われると、これ、しょうがないって認めれば、選挙だと石破が勝っちゃうけど、選挙のあとだったら、下手をすると、それがあまり出なくなっているから非関税障壁、もしかしたら財務長官が来て、それを持ち出して、もう選挙の投票日じゃないですか。というようなことをやる可能性があるというね。そういうのも、あんまり言われて無くなったからね、あれだけ言っていたのにね。解っているはずなのにね。

そうすると10%のあれになると、関税が25から15になるとかね、この辺の落としどころみたいなこともあるかも分からない。でも、私なんかは、こちらの希望的に消費税を無くした方がいいと思うんでね」

室伏「今、おっしゃったことの重要なポイントっていうのは、25とか30でもいいんですが、格好の数字って、こっちの関税と合わせるとかじゃなくて、そういう非関税障壁と色んな物も合わせて向こうが勝手に計算したものですから」

水島「そうだね。ああ、そうか」

室伏「正に輸出還付金、そして消費税を下げますという、本当は無くした方がいいんですけど、例えば10じゃなくて全部、一律5と国民が言っているみたいにしましたと。ほ

んと、多分、その方が無くなるっていう、その可能性は高いんですけど、恐らく今の赤沢さんがやっている交渉って…」

水島「後ろでね（笑）」

室伏「後ろに財務省が居て」

水島「そうそう、そう。いやいや」

室伏「全部、見ていて、自分達にとって不都合なことを言わせないようにしているんだと思いますね」

水島「いや、そう」

室伏「だから、結局、そういう意味で言うと、アメリカは本当の敵と本丸は、財務省だって解っているでしょうね」

水島「解っているね」

室伏「ええ」

水島「どうやって言うことを聞かせてね」

室伏「はい」

水島「ただ、もう一つ言うと、財務省がケチっているのは、あれもずう〜っと30年間以上、キャッシュディスペンサーになっていた役割を負っているから、やっぱりトランプ政権とFRBの関係というのも含めて、この辺が今、室伏さんが言ったように注目してね…」

室伏「うん…」

水島「見ておこなきゃいけないなあと、いやあ、だから、そこまで石破さんの頭がついていかないでしょう」

室伏「だから、あの人は何も考えていないですからね」

水島「無いよね」

室伏「もう本当にアッパラパァ〜というか空っぽって感じで、ほんと」

水島「うんうん。舐めんなよって言うだけでね。それで、じゃあ、リモートのお二人に聞いてみたいと思いますけど、この安全保障、日米安保の問題をお聞きになってどうですか。今、皆さんの意見も聞いたんですけど、用田さんはどうですか」

用田「はい。先程、中国の話をしていましたけども、正に習近平を倒して、所謂、鄧小平のグループにやらせるというのが、元々グローバリストの考え方ですけどね」

水島「そうですね」

用田「そのトランプからバイデンに替わって、大西洋評議会、アトランティック・カウンセルが出したのは、中共を倒せ、じゃなくて習を倒せ、だったんですね。だから、もし、

今、習近平が大変なことになっているなら、その中に大変なことになっているならば、それは、いつでも妥協が出来る体制に近づいているということが言えると思います」

水島「そうですねえ」

用田「それで日米安保の話については、結論から言うと、基本的に密約だとか色んな泥の迷路であった安保条約なんていうのは一回、破棄した方がいいです」

水島「うんうん」

用田「だから、私も日米は大切だと思っています」

水島「うんうん、うん」

用田「ただ今の日米安保で縛って、それは基本的に日本を抑え込むと」

水島「うん」

用田「瓶の蓋と」

水島「うん」

用田「これが基本的な構造になっていて、そして、それが密約というのがあって、それから色々な日米安保の日米の会議がある訳ですね」

水島「はい」

用田「これが何も影響していないという人は居るんだけども、そうじゃないですよ。アメリカの軍人は非常に高圧的ですから、日本の官僚だとか政治家は、みんな、ビビリ上がるんですよ」

水島「うん。そうですね、はい」

用田「よく知っていますけども、横田の司令官は中将ですけれどもね、高々中将だけど、彼はエマニュエルと一緒にですよ。総督のつもりですよ」

水島「なるほどね」

用田「だから自分が取り仕切って、何でも言うことを聞かせると」

水島「うん」

用田「だから、それに対して立ち向かえる人間が居れば別ですけどね、私みたいに立ち向かってクビを切られる人間とは別として、ですね…」

水島「(笑)」

用田「要するにそういう状況なので、基本的にはアメリカの言い分は全て通ってしまうんですよ」

水島「うん」

用田「だから、そういうものを含んだ、密約からずっと流れて来たものを含んでいる日米安保というものは一回、破棄した方がいい」

水島「うん」

用田「何故かと言うと、基本的に戦場が恐らく違う、さっき、ちょっと申し上げたように、ヘグセスの言ったやつは西太平洋で戦うと言いましたが、西太平洋で戦うのは、この前から申し上げております第一列島線で戦うんじゃないんですよ」

水島「うん」

用田「勝てませんから」

水島「うん」

用田「台湾で戦っても共倒れだと言っている訳ですよ」

水島「うん」

用田「共倒れなんかしたくないし、経済的に大混乱が中国と直接、事を構える、或いは、核兵器を持った中国と面と向かって戦うということは、大国間としては、もうやらないんですよ」

水島「うん」

用田「だから、そういう見方をすると、戦場が違うというのは、日本は第一列島線というか、この日本列島から離れることは絶対に出来ない」

水島「うんうん」

用田「これは南シナ海に行ったり、西太平洋に行ったりするのは、アメリカの海軍と空軍が第一撃を避ける為に避退をする、下がるということになっている訳ですよ。じゃあ、下がるんだったら、そもそも基地は要らないじゃないですか」

水島「そういうことですよ」

用田「そもそも、面と向かって、それを議論したことが無いんだと思います」

水島「うん」

用田「私は一回、アメリカへ行った時にやりましたよ。でも、彼らは、そこをモヤモヤっと、その部分は避退をするとか後退をするというんじゃないくて、違う英語を使って、要するに下がるという言い方をしないんですよ（失笑）」

水島「うん」

用田「英語だったので言葉は忘れまして。それは誤魔化しじゃないかというんだけど（苦笑）」

水島「まあ、昔の停止みたいなもんだね」

用田「彼らにとって非常に苦しいところだけでも、現実はどうなんですよ」

水島「うん」

用田「元々10年前からそうですよ」

水島「うん」

用田「だから、それが第一列島線というのは、日本は国土防衛ですから下がれないで戦うというものと、西太平洋にいったAUKUSのラインですよ」

水島「うん」

用田「ここで下がって中国を遠くから経済封鎖するということと、そして西太平洋で海軍で戦うっていうことに勝ち目があるかもしれないという風にアメリカは思っているかもしれないけども、それも五分五分だということに於いて、我々は同じ土俵で同じ共通の戦場で戦うということには、もう既によくよく議論すれば、それは、もうなっていないんだと思うんです」

水島「はい、そうですね」

用田「やっていないだけです。だから、それはそれでも仕方がないということで、対中国に対する同盟ということで改めてやれるところは何だということ、しっかり洗い出して、そして日米同盟の中に嵌め込んでいくということをやらないと、対等とか色々な関係があるかもしれないけども、完全に対等にはなれなくても、日本は下がれない日本の防衛で、アメリカがどういう役割をするんだと、いや、こうしろ、ああしろということ、日本が言うべきだろうなと。もう一回、言いますけど、戦場が違うということ、頭に置いておかなきゃいかんということ」

水島「そうですね」

用田「もう一つ、絶対に避けなきゃいけないのは、代理戦争ですよ。ネオコンとか戦争屋」

水島「うん」

用田「今、ウクライナが混乱するだろうなと思っているのは、トランプが、また武器をあげると。武器をあげると言ったらってペトリオットを10基ですよ。10発。それをドイツに手渡しさせようと。自分がアメリカから渡すものは、在庫としては無いんですよ。だから、やっていることは、そのぐらいのことです。でも軍人で、ケログが出ている訳です」

水島「うん」

用田「だから今回、よく解ったのは、アメリカの軍人は上から下まで全部ネオコンで、戦争屋、ウォーモンガーです」

水島「うん」

用田「彼らが日本も仕切っている訳です。だから我々が避けなきゃいけないのは、ウクライナ、そして中東で人間の生き血を吸った戦争屋、ネオコンが今度はアジアに流れ込んで来るとのことですよ」

水島「うん」

用田「これは絶対、避けなきゃいかん」と

水島「うん」

用田「だから、そういう風に彼らの言うネオコンとかそういうものが活躍するような土俵を造ってはいけない。だから日本が統合作戦司令部を創るのは絶対に必要な事だけれども、アメリカは今回トランプになって、大将にならなかったですよ。横並びにならなかった」

水島「うん、うん」

用田「本当に良かったと思いますよ」

水島「うん」

用田「ただ調整組織は残りますから、調整組織はアメリカが言う通りにやって行こうとするけれども、日本がこうするという風に言えるかどうかです。いずれにせよ、我々は代理戦争は、絶対に避けなきゃいかん」

水島「そうですね、それをやる可能性はありますね」

用田「いつの間にか、ですよ、いつの間にか台湾有事は日本の有事という人達、よく聞いて下さいよ。台湾の為に、日本の自衛隊を使おうとしている。自衛隊ですよ、軍隊じゃないですよ。日本は、その前にやることあるだろうと。その台湾の防衛は、台湾の防衛なんです。日本の防衛は日本の防衛で、日本に余力があれば手出しをして助けることは出来るかもしれない。でも、それは見捨てるっていう意味とは、また違うんだけども」

水島「うん」

用田「台湾防衛に行け、例えば日本のF2戦闘機から対艦ミサイルをもって、第一撃を中国の船に対してやる。第一撃をやらせるというのは、ネオコン、それからアメリカの、アメリカっていうか、そういう戦闘屋のやり方ですから」

水島「そうですね」

用田「そうすると、日本は最初に弾を撃たせられる」

水島「うん」

用田「日本と中国は勝手に戦っていると、そういうことになる訳ですよ。それは避けなきゃいかん」

水島「うん」

用田「それと、もう一つはフィリピン」

水島「うん」

用田「色々なものを型落ちした奴をやるのは結構ですが、フィリピンの防衛とか表に出て来るんだけども、これが南シナ海を何とかしなきゃいかんというのが、アメリカの願望なんです。この前から、ずっと申し上げてきたように、オホーツク海は、ロシアの核ミサイルを積んだ潜水艦が沈んでいる。南シナ海は、中国の潜水艦が沈んでいる。だから、中国は、アメリカにとっては自分の所に届くミサイルが南シナ海にある訳ですよ」

水島「うん」

用田「だから南シナ海、南シナ海って言うんだけども、フィリピンの防衛は米比総合防衛条約がある訳ですよ。アメリカが一義的にフィリピンを守る責任がある訳ですよ。だから、何故、日本がそこまで手出ししてやる。先程、申し上げたように、南シナ海まで入って来ようとしても、プリンス・オブ・ウェールズみたいに、水上艦は腰が引けて逆転して別の所から回り込んで来ると言う様なことしか出来ないんですよ」

水島「うん」

用田「だから私が言いたいのは、彼らの言うがままに、第一撃を日本がやらされてはいけない」

水島「うん」

用田「フィリピンの防衛はアメリカが第一義的にやって、台湾の防衛も責任は基本、アメリカでしょ」

水島「その通りですね」

用田「だから、要は代理戦争にならないという手筈をしっかりと頭に置いておく政治家だとか自衛官とか軍人が居ないと、これは、そのまま中東とかウクライナみたいに巻き込まれていく。

そして、もう一つは、最後のやつは、先程来、皆さんがお話になっている様に、日本は緩衝地帯です。これからのウクライナの行く末をよく見た時に、ウクライナは中立、核も持たせない、そしてミサイルとかそういうのもアメリカ軍配置をしない。キューバの二の舞はさせない。反対側ですね、丁度、反対側。

でも、それをやらせないっていうことは、じゃあ、よく考えて下さいよ。ウクライナが終わった途端、このアジアに於いて第一列島線に於いて、どうなるかと言うと、ここに対中国は重視だという建前っていうか、表向きの軍事的な理由以外に、今度は朝鮮半島から、日本から引いて浮いた金をアメリカが運用できるじゃないかと。アメリカの国内の中で、ジェフリー・サックス (Jeffrey David Sachs) だとか、こういう人間が今、そういう風に言っているんです。彼らのこういうのが強いんですよ。

要は緩衝地帯から手を引けと。それはウクライナもそうだけでも、アジアに於いても、基本的にはアメリカ、中国、ロシアが直接、戦わないように、ここは基本的に軍隊も置かなければミサイルも置かないと。中距離ミサイルも置かないと。こういうことに決まると、日本は空白地帯になる訳です。

だから先程、申し上げたように、アメリカの海空は第一撃を避ける為に避退をするということ、もう空白は出来るんですよ。だから我々は夢を見ちゃいけない。現実をよく見ていると、これは基本的に、日本は自分でやらないかん」

水島「うん」

用田「それは船を沈める潜水艦と機雷と対艦ミサイルと、それから核兵器。電磁波。それから無人機と、こういうやつを全部、含みますけどね、この前、水島さんにもお見せしたように、コンテナ・ミサイルっていうやつがある訳ですよ」

水島「ああ、そうですね」

用田「中国もロシアも何処だって、そんなの持っている訳です。そこからギュギュっとミサイルが出て来て撃つ訳ですよ。それに近い事が、無人機がピューッと出て来てポッと撃ったって世界だけでも、台湾も基本的に同じような状況になると思いますよ。日本よりも、日本は、あまりいい状況じゃありませんけど、そこをやられてしまうと」

水島「うん」

用田「だから戦争の形式は変わって来ているし、アメリカはそこに存在しないっていうことになる、誰が日本の防衛やるのっていうのは、もう日本しかない訳です。だから、我々が切り札をもって、そうしなきゃいけない。だから日本はフィリピン、台湾の戦場を任されて、第一撃をやる馬鹿なことをやってはいけないっていうことと、だから、その前に専守防衛とかそういう間違っただけの政策を廃止して、軍隊を持って、そして核を持って戦う態勢をしっかりと作って、外国人も基本的に土地を買わせないとかそういう風にしなくちゃいけないと」

水島「うん」

用田「最後に残念なことを一つ言わなきゃいけないんですけど、一回、言ったことがあると思いますけども、自民党に慮って、竹光を持った偽武士の自衛官OBの政策提言と、この前、一度、お話ししたことあるけども、残念ながら自衛官も腰抜けが多くなりました。OBも含めて」

水島「うん」

用田「それは二つあって、憲法の改正で国を防衛する実力組織（国防軍）ですよ」

水島「うん」

用田「そして、自衛隊を保持することに憲法を明記すると共に、国際法上の軍としての権限行使が自衛隊に認められる旨を明記。何のことはない、ぐじゃぐじゃ言っているけども、自衛隊を憲法に明記して、これを軍隊と認めてくれと誰に言っているんだと。中国が認めない、アメリカも認めない、外国は絶対、認めないですよ。Self Defense Force ですから、これは、こんなこと、こんな文章を書くような政策提言が自衛官のOBの、大きな4つの組織の中の集約した意見として出て来ているということ、私は大変、恥ずかしく思います」

水島「そうですねえ」

用田「そして拡大核抑止についても、平時から状況に応じて、核搭載米軍艦艇等の領海通過や寄港を認めると共に、拡大抑止協議の内容を進化させて、我が国が関与するメカニズムを創る。こんな、バカな文書。日本にはもうアメリカの拡大核抑止は無いんだという議論が解っていない訳です。韓国は70%の国民が自前の核を持つべきだと言っている訳ですよ。これだけ日本国民は腑抜けになってしまった」

水島「うん」

用田「だから元の話に戻りますけど、よその国から日本が尊敬されるとか置いてけぼりを喰らわないということは、全く無理なことであって、自ら墓穴を掘っているというのが今の状況だということだと思います。以上です」

水島「全くその通りですね。やっぱり、この問題を直視しなきゃいけない問題ですよ。やっぱりねえ、産経なんかはそうだったんですけど、麻生元首相が台湾と日本は運命共同体だと。何故か、それを言うと喝采する訳ですよ。いやいいですよ、でも、じゃあ、どうするんだと。運命共同体で台湾が攻められたらどうするんだって、何も無い。結局、非難するだけですよ、中国の暴挙に対して『許し難い暴挙』と言ってね、自分達は手を出せないですよ。

今、言ったように第一撃目はそのまま来ますからね。だから、こういうような具体的なことのないまま、やっぱり煽っているっていうね、はっきり言うと、国基研とか、そういう今の自衛隊のOBの人達は一体、国の事をどう思っているんだっていうことだと思いますけど、はい、どうぞ」

モーガン「台湾有事は日本有事とか、中国からすれば、それは非常に解り易い構図だと思うんですけども、台湾有事は日本の有事だって言っている軍隊の無い日本からすれば、それは、アメリカが救ってくれると」

水島「そうですね」

モーガン「来てくれるっていうことが大前提で、中国からすれば、日本があんなに弱い国だと。自分が台湾を守ると偉そうに言っているんですけども、軍隊が無い。じゃあ、アメリカに頼っているんでしょと。親分子分関係がはっきりしている関係で、中国が日本を見て、あざ笑いすると思いますよ。お前はただの子分でしょと、その扱いをされても仕方がないと」

水島「うん」

モーガン「本当に軍隊があればいいんですよ」

水島「うん」

モーガン「台湾有事は日本の有事。でも親分子分は、どっちがどっちかと、よく解っているはずじゃないですか」

水島「全くそうだね。掛谷さんは、この問題はとうですか」

掛谷「はい。中国の話で勿論、軍事力を強めるのも凄く大事ですけど、もう一個、やっぱり中国の経済力を弱める努力をするっていうのも絶対にやるべきで、先程、関税の話で、同盟国なのに25%と言いますが、これは明らかに石破潰し、石破下ろしですよ。

要するに、このタイミングで、それをやってきて、あとベッセントさんが19日、選挙の前の日に来る。これも明らかに石破政権が、あまりにも中国寄りなので、私はアメリカは、やっぱり日本を西側の壁にしようと思っていると思うんですね。だから中国と結んで、日本緩衝地帯というよりは、やっぱり西の壁として未だ使えるという具合には思っている。

だからこそ石破政権が今、やっていることが許せないってということで、下ろしに来ているってところが現状じゃないかなあと思いますね。それに対して、日本がどうするかっていうのが、日本人の選択ですけど、恐らく日本の上の方の人達は、中国とベッタリの方が美味しい思いをするから、中国に寄っているんですけど、多分、殆どの国民は、中国に寄るよりは、アメリカに寄っていた方が現時点ではいいと思っている人が殆どだけれども、その民意が反映されていない状況で、今回、選挙があるということで、そういう意味で言うと、今はアメリカの圧力に乗った方がいいんじゃないかなあとという具合に思っています。

今、アメリカの動きとして、フェンタニルの問題だって明らかですよ。石破下ろしと関係して、要するにアメリカの大使館が結構、それを発信していますし、あと、今、アメリカの方ではパムボンリとキャシー・パテルがエプスタイン・ファイルは無かったって言って、アメリカの国内、物凄く怒っていますけど、一方でキャシー・パテルが最近、中国の研究者がアメリカのウィルスの研究機関にハッキングしていたみたいな情報を出しましたよね。私も細かいところを見ていないんですけど、だからアメリカは、やっぱり皆さん、日本人って直ぐ忘れるんですけど、新型コロナウイルスをつくって洩らした、勿論、アメリカもファウチとかが協力していた訳ですけど、日本人って直ぐに恨みを忘れませんが、西洋人は絶対にこの恨みを、全然、忘れていません。

更に言うと、ウィルスの被害がこれだけあったプラス、当時、中国はそれで戦略物資を止めたじゃないですか。それで世界中も大混乱。だからこそ、アメリカに製造業を戻すっていうのは、失業対策だけじゃなくて、その問題もある訳ですよ。ということで、アメリカは、そういう5年前の恨みを忘れていないですよ。日本人は、もうすっかり忘れていますがね」

水島「うん」

掛谷「だからアメリカなんかコロナの起源の話も関心があって、7割以上が研究所起源だっていうことを思っていますし、日本人なんて、そんなことも知らないですよ。だから、私は世界が中国包囲網が出来るか出来ないかっていうことと言うと、コロナの恨みって、かなり世界であるので、そこに私は乗った方がいいと思うんですよ。世界中の人は恨みを忘れませんから。それで中国を、ある種、国際的な貿易の枠から出来るだけ外して、経済力が弱体化すれば、戦争なんて出来なくなりますから、勿論、軍事力は、日本で高める必要がありますけど、ほぼ同時に中国の経済力を弱める為に全力を尽くすっていうこと、この両方をやる必要があると思います」

水島「うん。そうですね。だから、さっき言った、この8日のあれですけど、これも報道されなかった文書によると、USAIDは正式な合意が無かったにも拘らず10年間、何千ものウィルス・サンプルを武漢の研究所に送っていたということが、情報公開法のお陰で明らかになったっていうことですね。今、掛谷さんが言ったように、そのう…」

掛谷「それはデイリー・コーラー (Daily Caller) の記事ですけど」

水島「そうですね」

掛谷「その記事はエミリー・コップ (Emily Kopp) と言って、彼女はずっと新型コロナ起源を追いかけていて、情報公開請求を何度もかけた調査報道のジャーナリストで、ま

た、彼女がやってくれたってということで、未だ若い女性ですけど、エミリー・コップの業績は、本当に物凄く大きくて」

水島「そうですねえ」

掛谷「本当に日本のジャーナリストは一体、何をしているんだって言いたくなります」

水島「全くおっしゃる通りですね。勇気が要りますからね。全部の製薬会社や色んなものに関わっているね。今、医師会とかこういう罪も全然、出ないですよ。あれだけやって、打ちまくってね、あまり言うと、これも、また、まあ、あるんでね、あれですけど。医師会は本当に無批判にやって、こういう日本国民に色んな事を始めて、やり続けたっていうね、それで、これが、また武見さんっていう厚生労働大臣がその代表として、今、参議員にも出ているというね、これが今の日本の現状ですよ。だから本当に尊敬されませんよねえ（失笑）、というようなことですけども。

もう一つ、先程、BRICSの話が出たので、トランプの言っている事は何処まで本当か判りませんが、こういうことです。『BRICSは米ドルを破壊する為に創設された』と。『我々は<基軸通貨>の地位を失うわけにはいかない』『もし、米ドルが世界の基軸通貨としての地位を失えば、それは、まるで世界大戦に敗北したようなものだ。我が国は最早、今のような国家ではなくなるだろう』というね。

つまり基軸通貨を失うっていうのは世界大戦と同じだったぐらいの、少なくとも、まあ、何処まで信じ続けるかって、いつもありますけど、これはトランプの、ある種の本音でもある。つまり基軸通貨体制っていうもの自体に対しては、アメリカは、はっきり世界性を持ったものとしてやろうとしているっていうこともあると思います。

ということで、今日は色々皆さんに大変、スリリングなっていうか、面白いお話をして戴けたと思うんですけど、最後に皆さんから一言ずつ戴いて終えたいと思います。室伏さんからお願いします」

室伏「はい。色んな論点が出て、最後は安全保障とかそういう話になったんですけど、まずは日本が今、ここで今日の相手にされなくなったっていう、この現実は、やっぱり最初に引き受けることですね」

水島「うん」

室伏「今回の参院選で自民党から出られた方もね、日本は世界から、こんなに尊敬されているんだって言うんですけど、いや勝手に思い込むのはいいんだけど、そういう問題じゃないだろうと。結局、先程、どなたかがおっしゃっていましたが、弱い国っていうのは相手にされないんですよ。だから国際法だとかね、あとは価値と何とかを共有する何とかとか、あと、僕は、あの日本国政府が使う『同志国』という言葉が大っ嫌いっていうか、本当に気持ちが悪いです。もう胸焼けがするみたいな、ほんとにジャンクフードみたいな言葉ですけど、そんなもの居ない訳ですよ」

水島「そうです」

室伏「だから、そういう国際政治の現実と、日本って今、正にジャパン・パッシングされて、別に自己卑下する為じゃなくて、日本が置かれている現状はこうなんだっていうことを、まず認識するところから、一応、形上は世界の一桁台の経済大国とかG7に入った先

進国ということになっていますけど、実態はそうじゃねえだろうっていうところから始めないと、真面な政策とか打てないですよ」

水島「そうですね」

室伏「だから、その話をしたとしても、大手メディアでね、平気で日本は今、景気がいいとかって言って、何処がいいんだと」

水島「そうですねえ」

室伏「四半期GDPはマイナスだろうっていう…」

水島「実質賃金は全部下がっちゃっていますからね」

室伏「ええ。今年のアットGDPって言ったって、年率換算でマイナスだろう何処が良いんだよっていうね、もう何かね、そういうトンチンカンなことが言われてしまうっていうか、政治家でも平気で賃上げで良かったとかって言う訳じゃないですか。いや、そうじゃないっていう、やっぱり、まずは現実を認識して引き受けるところからじゃないと、安全保障の話にしても貿易の話にしても、対中国の話にしても出来ないんじゃないかなあという風に思いますね」

水島「その胸焼けのあれっていうのは、私達、親友だよって言われると、言われた奴が困っちゃうっていうね」

室伏「(笑)」

水島「お前、いい加減にその無神経が何なんだというね、こういう感じ(笑)、今のを聞いていてね、嫌だね、本当に石破君。はい、まあ(笑)じゃあ、宇山さん、お願いします」

宇山「はい。私の方から最後にフェンタニルの問題を挙げたいと思うんですが、名古屋で、そういう拠点があったということで日経新聞がスクープを飛ばした訳ですけども、この問題はしっかりと政府があげて対応しなければ、私は国際的にも、えらい問題になると思います」

水島「その通りです」

宇山「やはり、これは日本の反社組織が中国とつるんで行った巨大な犯罪ネットワークが、地下水脈のようにあるということを物語っている氷山の一角であるというように思うんですね。そして行政が知らなかったはずがないんですよ」

水島「そうです」

宇山「行政も全部、グルで反社、中国と三位一体で、こういうことをやり、そしてアメリカにフェンタニルを流していたということ。これは本当に国際犯罪です。その国際犯罪の一角を日本がこういう形で担っていたということに、日本はいつから、こんなヤクザ国家になったんだと。巨大な闇を感じずにはおれませんね」

水島「全く、その通りですね」

宇山「はい」

水島「これは、やっぱり諜報機関とかね、日経が出したっていうところもね、本当にそういう背景に色んなものがあるっていうのが、もう直き、出て来るでしょうね」

宇山「(頷く)」

水島「それも、やらなきゃいけないですよ」

宇山「そうです」

水島「はい。有難うございます。ではモーガンさん、お願いします」

モーガン「はい。今日は有難うございます。本当に色々貴重な意見を拝聴出来て、本当に良かったです。有難うございます。日本が相手にされていないっていうのは、やっぱり、ワシントンの属国だからだと思います」

水島「うん」

モーガン「日米同盟を考える時に、コミットメントを考えた方がいいと思います。米と日、もし戦争が勃発すれば、アメリカ人が命を懸けて日本を守るはずがないんですけども、あまりにもコミットメントの差が大きくて、先程、掛谷先生がおっしゃったトランプからすれば太平洋側の一番、西の壁になるとか、トランプは、その考えかもしれませんが、私はそうだとすれば困ります。この日本は、日本の為に戦いたいと思います。米を考えないで、この日本だけを考えて戦いたいと思います。コミットメントが非常に重要な問題で、BRICSとか、もう一つ入る価値のあることだと思いますけれども、違う角度から物事を見ることが出来ると、それが一つの大きなポイントだと思います。

500年間、ずうっと搾取されてきた国々の立場から見れば、やっぱり世界が違って見えるなあとあって、日本は80年前までその国々の側に立って戦っていたので、日本が再び、そういった国々の側に立って、白人がずうっと500年間、やってきた搾取を終わらせようとする動きに入れば、それは世界史を変えるパワーがあると思います。

日米同盟を手放すことが絶対に必要だと思いますけど、手放す前に色んな取引をすれば、日本の国益に繋がると思います。例えばロシアとか色んな国と秘密な交渉をして、実は、日米同盟をやめるけども、その代わりに何か得られるものがあるか。そういった交渉をすれば、ただ手放すだけじゃなくて、まあ、核武装してからやめたというのではなくて、日本の国益を最大化することが非常に重要だと思います。

もう一つ、この間、及川先生の動画を観て、鳩山由紀夫元総理大臣がおっしゃった日米合同委員会が何を言っているかと、私は知らされていないって、総理大臣として何が語られているか解らないって、この日本って何処が民主主義かと、日米合同委員会が日本政府を操っていて総理大臣さえ知らないって、とても重要な動画だなあとあって、トランプは八百長大統領、それは名言だなあと思いました。

トランプは例外的な人間ではなくて、白人の鏡ですね。みんな、そういう感じでワシントンは80年間、八百長ばかりやって来て、だから空爆が好きなんです。パフォーマンスの価値が高いんですけども、でも白人は誰も死なない。そういった八百長ばかりやって来ていて、パフォーマンスを見抜いている殆どの全世界ですけども、未だに信じているのは、ワシントンと永田町ぐらいですか。

最後、伊藤先生が、いつも社長がおっしゃっている日本人が世界で最も卑怯とか臆病とか。私は恐れ入りますが、ちょっと違うと思います。私は世界で日本国民が最も勇気のある、最も心の温かい、最も信頼のできる国民だと思って、但し、上の人々が駄目だ」

水島「うん」

モーガン「但し、その一層だけが日本人じゃなくてアメリカ人だと思います。在日日本人と言ってもいいかな。でも、私は日本国民を信頼しています。失礼ですが用田先生が本当の日本人だと思います。みんな、そういう感じだと思います。本当に日本が危ない、本当に、いざとなった時に、みんな、用田先生の心の持ち主だと直ぐ判ると思います。卑怯ではないと、私は思います」

水島「なるほど」

モーガン「私は日本人を信じているというのが、最後の言葉です」

水島「はい。有難うございます。私も、そう思うので、この『草莽崛起』というのは、そういうことです。上の連中は駄目だけでも、いざとなったら普通に働いて普通に子供を育てている日本人が、ネクタイを外して戦いに出て行くっていうことは本当にあるんじゃないかというね。まあ、あると信じているので、実際、チャンネル桜を開設したりしているんでね。『草莽崛起』っていうのは本当にそこだと思います。モーガンさんがそういうことを言ってくれれば、本当に嬉しいですね。私もそれを信じたいし、信じています」

モーガン「信じています」

水島「有難うございます」

モーガン「期待しています」

水島「はい。では、折本さん」

折本「はい。今日のテーマは『世界から相手にされなくなった日本の現在』ということですからけれども、私は別に誰からも相手にされる必要は無いという風に思っています、日本は日本なので、別にそんな友達なんか居なくていいと思っています。そもそも国際関係に於いて、やっぱり先程の話にもありましたけれども、真の同盟とか友好関係なんていうのは、あり得ないことだという風に思います。

やっぱり、その価値と利益を共有すると言いますけども、やっぱり何処まで言っても最終的には外国とは解かり合えないと。だからこそ、あくまでも自分は自分だと。まず自立して然る後に初めて、こういう同盟なり、国際関係っていうのは構築できるんだと。ですから、まずはアメリカに捨てられたから、じゃあ、次は何処と組もうとか、そういう話じゃなくて…」

水島「うん、そうだね」

折本「やはり日本は日本だ。ただ、じゃあ、日本とは何なのかということ、突き詰めていく必要があるんじゃないかなと。本来の日本のあるべき姿。こういう道義的な理想みたいなものが、やっぱり見失われてしまっているということが、根本の問題んじゃないかという風に思いますし、やっぱり守るべき価値は何なのかと」

水島「うん」

折本「日本政府が日本が何なのか判らなくなっているというところが、根本の原因かなあと」

水島「うん。その通りですね」

折本「それは、やはり皇室を頂く家族国家としての固有の国柄であるとか、そういうものを守って行くということだと思っんです。それを取り戻すのが一つの維新であって、更に精神を世界に広げていくというのが、私は興亜だと、アジアを起こすことだという風に思っているんですね。その天皇と国民との間にある道義的な関係をアジアとか世界に、むしろ日本が先頭に立って善導して行くというぐらいの気概が必要だと。友達を探すんじゃないくて（微笑）、虚構の友達ではなくて、そういう意味では、やはり明治以降の我が国は正に、そういう日本の古来、固有の道義精神を世界に広めていく、非常に世界史的な戦いを繰り広げた壮大な栄光に満ちた、こういう歴史だったと思っんですね。

大東亜戦争に結実する、その中で、やっぱり八紘一宇の精神を掲げてアジアの国々の独立運動を支援した訳ですから、やはり、この遺産が今も厳然として残っているという風に思っています。ですので、アメリカとの対等な関係を築く必要はあると思っんですけど、同時に、このチャンネルを多角化してアジアに軸足を移していく必要もあるという風に思っています。

その為には、先程、BRICSの話もありましたけども、最終的には、例えばBRICSにしてもグローバルサウスにしても、インドで言えば、インド国民軍で戦ったり、インドネシアで言えばムルデカ闘争ですね、カリバタ英雄墓地には今も日本兵の屍が眠っている訳です。フィリピンだってアルテミオ・リカルテ (Artemio Ricarte) ですね、そういう志士を日本人が助けて独立運動を支援して、アメリカからの独立闘争を支援した歴史がある訳ですから、そういう歴史をしっかりと共有をすれば、必ずBRICSからチャイナ、チャイナを東南アジアから引き剥がすことは可能だという風に思っっております。

ですので、そういう意味では、我々がこの道義国家として、もう一回、立ち上がって、我々が世界を善導して行くんだと。こういう道義国家として、我々がやって行く必要があるんだという風に考えました」

水島「全くそうですね。だから、さっき台湾有事は日本の運命共同体っていう、いい加減なことじゃなくて、自分達がしっかりすれば、中々そういう手を出せなくなるというね、やっぱり確かに我々がしっかりすることですよ」

折本「はい、そうですね」

水島「それが出来ていないということだと思っんですけども、はい。有難うございます。では、掛谷さん、お願いします」

掛谷「はい。最初も言いましたけど、若い人は本当に今、素晴らしくて、結局、私の世代とか、その上の世代って、その更に上の世代が積み上げて日本を豊かにしたものを全部、吐き出す、穀潰しだった訳ですけど、それを見て、若い人から非常に優秀な人が出て来ているので、そういう人を潰さない、今、あれですよ、社会保険でも非常に世代間ギャップがあって、我々の世代なんか結構、そういう若い人をパワハラで潰すような教員もそれなりに居て、そういう噂も学会に行くとか聞く訳ですよ」

水島「う～ん、何だかねえ…」

掛谷「今回の選挙で、やっぱり、もうちょっと世代間対立になっています的な要素がありますけど、とにかく若い人が輝けるような政策を言っているところに投票できればいいかなと思っています。あと、もう一つは、国防と言った時に、やっぱり、とにかく、それを担う人が居なきゃいけなくて、実は、ちょっと宣伝になるかもしれませんが、今、発売中の『MAMOR (マモル)』という雑誌がありますよね。そこに今月は予備自衛官の特集号になっていて、私も出ておりますので」

水島「(笑)」

掛谷「もし宜しければ、それを見て載いて、視聴者の方でも我こそはっていう方は志願して載ればいいかなあという具合に思います。以上です」

水島「本当にねえ、予備自衛官の話も3.11の時は全然、使われなかった。もう、みんな、よしっ行くぞ、救いに行こうって言って、それは、ずうっと待機でというような状態とか、本当に予備自衛官の数も少ないしね、本当、言う、日本の場合は徴兵制までやるかどうかはともかく、社会的に何か貢献するね、そういう時間っていうのは、やっぱり設けなきゃ、国民としての意識をね。

私は本当に徴兵制、徴老制、ジジィ、ババアになったら、お互いに年寄りを助け合うみたいな、何かそういう社会的な、反対はいくらでも出ると思うけども、徴兵制も含めて、兵隊が嫌だったら何か社会貢献するとかね、こういうことを小さい頃から教えるべきだっていうね。

国家意識をもつ為って言うか、国のそういう意識を持つ為にも、どんなに我々の国が素晴らしい国かっていうのを自覚して貰うっていうねえ、やっぱり教育が本当に大事だと思いますね。はい、有難うございます。では、用田さん、お願いします」

用田「はい。私は外交、防衛で主権を取り戻すと」

水島「はい」

用田「それで、やっぱり本体は外交と防衛と」

水島「うん」

用田「これは日本を取り戻すということで、その上で日米安保とか色々なものを考えていくっていうのは必要だろうと。難しいですけども、アメリカを敵に回す必要は全く無い訳ですけども、アメリカとロシアと協調した中立という、まあ、本当に出来るのかどうか判りませんが、アメリカはロシアと協調という部分が非常に大切になって来るだろうと思いますし、先程、ジェイソンさんが言われた様に、BRICSには、私も大変、興味があります。

でも玉石混交、正に中国とブラジルというのが独裁ですから、このところは非常に危ない。しかし、それ以外の所で、例えば、インドネシアも入りましたし、中東の国も入りましたし…」

水島「まあ、インドとかね」

用田「はい。インドも居ますし、そういう意味では、これを正会員でなくてもいいから、何とかオブザーバーでも何でもいいから入らないかと。でも、これを何かアプローチすると、アメリカが激怒するだろうなあと思いますが、だから外交、防衛の独立が必要だということだと思っています。それが出来れば、でも私も自信はありませんけども、銀座へ行ったことはありませんけども、銀座の高級クラブに誘惑されずに黙って入っていけるかという自信があれば、この日本の総理は自信があれば、そういうBRICSとかそういうことに対して、自分が分け入って入って行くということはあるのかなあという風に思っています。

もう一つは、初めに多分、水島さんがおっしゃっていた通り、日本は仏教と神道と儒教、この3つを取り戻さなきゃいかんと思っています。仏教とかキリスト教とか、やはり天国地獄だとか、高み、それから深み、これがあるのが、縦軸が仏教で、神道というのは非常に神様も一緒に働くという横軸、この横軸の部分がヨーロッパには全く欠けているんだろうなと思います。縦軸だけで着物は織れない、着物を織る為には縦軸、横軸、そして、儒教という知恵が必要だと。これが出来ると、基本的に日本というのは、本当に尊敬される国になると思いますよ。最後に、今回は選挙で、自民党、公明党、立民が大敗する事を願っています」

水島「はい（笑）」

用田「そして、じゃあ、そのあと、どうするのと言ったら、そんな腐れた政治家に任せる必要は全く無いので、『草莽崛起』という言葉は、最近、どういう訳か水島さんの顔と共に出て来るんですけどね（笑）」

水島「（笑）」

用田「やっぱり『草莽崛起』で、若い力が出てくれば、この国は変わるという風に思います。だから恐れることなく、自民党を大敗させて、その中から新しい、最初からいい形にはならないと思うけども『草莽崛起』の芽が沢山、出て来ることを期待をしています。以上です」

水島「有難うございます。カオスっていうのは悪いと思わない方がいいと思いますね。だから、一回、全部、敗戦利得者の世界を全部、ぶっ壊してみるっていうことはね（苦笑）やっても、それで、我々が、さっきモーガンさんが言っていたけど、それ程、日本人は、庶民は結構、真面な意識を持っていますから、だから、こういう政治家共、利権屋共も、みんな、一掃しても意外ともつと思いますよ。

それと政党がこういう理念というのを色々言っているけども、その政党政治っていう自体が終わって、それぞれの個別の立派な事を考えている人達が出て来れば、私は意外となつて行くと思いますね。こんな、ろくでもない政治をやっているんだから、ねえ、ここの皆さんがやったら本当に良い政府が出来ると思いますよ。はい。というようなことで、今日は寂しい日本ということで、でも、やっぱり我々がしっかりすれば人は寄って来てくれるというね、国も寄って来てくれると思います。はい、有難うございました」

一同「（礼）」

***** お わ り *****